大会感想文

≪ A 隊 ≫

〔 第 1 班 〕

学校名	都道府県	監督名	リーダー名	選手名		
岩手県立黒沢尻工業高等学校	岩手県	高橋 達弥	高橋 暦治	飯塚 拓也	刈田 雄平	田島 秦
神奈川県立麻溝台高等学校	神奈川県	井上 康輔	砂川 大喜	林 達也	望月 直樹	篠﨑 祐弥
愛知県立旭丘高等学校	愛知県	森 克彦	川北 拓人	澤田 直輝	藏立 元紀	髙木 陽太
和歌山県立田辺高等学校	和歌山県	土永 浩史	上垣 紀之	谷河 育朗	森下 浩行	榎本 大誠
岡山県立岡山操山高等学校	岡山県	小池 哲晴	神原 純	大山 智文	鈴木 暉隆	菅﨑 拓真
熊本県立熊本高等学校	熊本県	佐竹 正恵	出口 健太	芹川 慎一郎	谷口 竜星	諸熊 聡

〔 第 2 班 〕

学校名	都道府県	監督名	リーダー名	選手名		
宮城県白石高等学校	宮城県	樋口 史明	豊島 健太	大槻 弘晃	田中 康朗	相原 貴次
栃木県立大田原高等学校	栃木県	猪瀬 修一	比企 史明	山口 陽平	齋藤 智寛	山口 雄大
富山県立富山高等学校	富山県	栄 秀樹	豊嶋 裕太	清水 航大	古本 雅之	湊山 周平
兵庫県立柏原高等学校	兵庫県	横山 昌弘	岸本 祐也	植田 尚輝	若林 誠	奥田 将守
香川県立観音寺第一高等学校	香川県	西村 真也	安藤 寿成	西田 洸	渡邊 耕平	阿野 祐汰
福岡県立福岡高等学校	福岡県	森山 英治	谷倉 快	野寄 泰平	竹中 章太	村岡 健夫

〔 第 3 班 〕

学校名	都道府県	監督名	リーダー名	選手名		
八戸工業大学第一高等学校	青森県	樋口 寿昭	田中 大希	鯨井 勇太	中野 翔太	下澤 貴裕
正智深谷高等学校	埼玉県	吉野 聡司	有山 直樹	亀井 勇太	戸谷 峻汰	平野 貴裕
新潟県立長岡大手高等学校	新潟県	星野 雪彦	貴島 輝	白川 大暉	天野 輝	佐藤 慎也
洛星高等学校	京都府	堀井 純	松原 良一	杉原 優	小林 優眞	細川 剛司
島根県立松江北高等学校	島根県	柿田 訓宏	平塚 寛隆	吉岡 祥平	原 洋揮	石橋 和也
鹿児島県立鶴丸高等学校	鹿児島県	江口 智	山下 泰広	濵田 晴都	堤 宗一朗	岡村 勇汰

〔 第 4 班 〕

学校名	都道府県	監督名	リーダー名	選手名		
山形県立東根工業高等学校	山形県	佐藤 勝雄	笹原 竜次	後藤 吉健	推名 克弥	奥山 伸哉
茨城県立総和工業高等学校	茨城県	山中 督	臼居 哲良	小平 翔矢	細谷 洋輔	五十嵐 隆仁
新潟県立新潟県央工業高等学校	新潟県	石川 恵子	髙橋 将汰	波塚 崇宏	藤田 一馬	佐藤 汰紀
滋賀県立水口東高等学校	滋賀県	森田 光治	船田 圭輔	土田 祥生	星野 司	平井 尚輝
山口県立下松工業高等学校	山口県	細木 祐吾	河原 唯人	岩政 龍朗	池田 侑平	江藤 純
大分県立竹田高等学校	大分県	髙橋 憲一	河村 元太	赤木 舜	若杉 耀介	衛藤 史弥

〔　第　5　班　〕

学校名	都道府県	監督名	リーダー名	選手名		
福島県立白河高等学校	福島県	横山　博央	益子　康太朗	荒井　就英	船生　仁	井戸沼　昇吾
山梨県立韮崎工業高等学校	山梨県	山本　健一	大柴　結人	依田　鷹樹	中嶋　敬太	芳賀　大輝
福井県立科学技術高等学校	福井県	柄田　正行	平井　慎悟	早瀬　史登	鉾田　翔太	牧野　真太郎
静岡県立富士宮西高等学校	静岡県	森下　峻也	富永　真平	新林　卓也	原田　祐希	沖　健太
鳥取県立境港総合技術高等学校	鳥取県	岩田　顕作	福井　大地	景山　智春	松下　竜也	影山　航輔
佐賀県立佐賀工業高等学校	佐賀県	末次　広人	松尾　佳介	高柳　貴史	長尾　賢	松永　竜次

〔　第　6　班　〕

学校名	都道府県	監督名	リーダー名	選手名		
明治大学付属中野高等学校	東京都	足立　憲治	上村　悠馬	佐山　達郎	松原　宏実	山本　浩輝
長野県松本県ヶ丘高等学校	長野県	松田　大	塩谷　晃司	平田　雅人	坪田　塁	平林　健太郎
近畿大学附属高等学校	大阪府	芝池　宗克	中栖　久昌	建林　貴裕	前田　宣輝	村田　幹大
修道高等学校	広島県	内藤　弘泰	村上　大暉	安井　悠生	箕田　幸太郎	三村　康太
土佐高等学校	高知県	利岡　幸信	永野　知徳	服部　晶人	波多野　陽輝	中谷　知雅
宮崎県立宮崎西高等学校	宮崎県	下村　真一	章　性源	小城　慶久	上田　哲平	黒木　利樹

〔　第　7　班　〕

学校名	都道府県	監督名	リーダー名	選手名		
秋田県立横手高等学校	秋田県	山信田　修	齊藤　貴喜	佐藤　瑛彦	岡部　嘉慰	今野　一真
千葉県立千葉東高等学校	千葉県	原　邦夫	今長谷　昴平	山下　大貴	小原　岳輝	川田　航士朗
石川県立金沢泉丘高等学校	石川県	西崎　伸子	大澤　一人	松本　耀介	貫井　洋介	西下　遼介
愛媛県立松山南高等学校	愛媛県	宮﨑　雄一	門田　尭之	山本　洋輔	城戸　滉平	宇都宮　哲也
長崎県立長崎北陽台高等学校	長崎県	江口　友広	川崎　雄大	高橋　諒	大町　侑也	今木　悠太

〔　第　8　班　〕

学校名	都道府県	監督名	リーダー名	選手名		
北海道札幌北高等学校	北海道	菅原　健夫	山本　巧	石谷　直貴	神谷　俊太郎	茂田　空
新島学園高等学校	群馬県	黒澤　達行	櫻井　拓也	小宮山　俊	北畠　周	小池　碧
三重県立神戸高等学校	三重県	谷岡　芳幸	尾崎　達哉	山田　樹	森田　智貴	境　健斗
奈良県立郡山高等学校	奈良県	増田　正博	武田　大樹	今中　亮平	濱田　真路	田中　大輝
徳島県立城ノ内高等学校	徳島県	小濱　愛	野間　隆礼	石田　晃基	河野　健人	山田　雄大

Ａ隊１班　岩手県　黒沢尻工業高等学校

私達黒工山岳部は、昨年の全国高校総体で３位という成績をあげ、今年はその成績を超えるという目標と、入賞しなければならないという大きなプレッシャーを抱え大会に臨みました。一日目のペーパーテストでは、それぞれのテストで何問か不安な問題があったものの、自分達の長所である体力の強さと歩行技術の高さで挽回できると思っていました。

二日目の平標山コースでは序盤に急登が続いたものの、A 隊の先頭のペースも遅めだったため問題なく山行を楽しむことができました。しかし地点確認で二カ所間違ってしまい 0.8 点という大きな減点をしてしまいました。朝からガスがかかっており、美しい山並みを望むことはできませんでしたが、適度な登りやすい気温だったので、とても気持ち良かったです。

三日目の苗場山コースでは、第一高速リフト降り場までチーム行動でした。自慢の体力と歩行技術を活かし１位で目的地に到着することができました。東日本大震災を乗り越え元気に頑張っている姿を見せたかったこともあり喜びもひとしおでした。また、上位６チームの中に東北勢が３チーム入っていたことがなによりも嬉しかったです。苗場山に近づくにつれ起伏が激しくなっていくコースでしたが体力や歩行に問題はなく、地点確認や記録帳も落ち着いて仕上げることができてよかったです。また、天気も適度に良く前日よりも山行を楽しむことができました。下りのドラゴンドラでは、世界一の長さと速さにビックリして感動しました。他県の代表とも交流を深めることができたのでよかったです。

四日目の三国山コースでは、山行最終日ということもあって疲れが目立ち始めましたが比較的緩やかなコースだったので、この日も問題なく登ることができました。途中から審判員もいなくなり、後半は緊張することもなく楽しく山行を終えることができました。下山時には大きな達成感に満たされました。

五日目の閉会式では、何よりも結果発表に緊張しました。結果は 10 位。体力・歩行点は全チームの中で唯一の両満点だったものの、
地点確認や幕営での減点が大きく響いてしまいました。幕営では二回の審査ともペグが刺さりきらない場所に当たったので、正直な話不公平だと感じました。結果には悔いが残るものの、県代表として他県の代表のみなさんと三日間登り切れたことを誇りに思います。

Ａ隊１班　神奈川県　麻溝台高等学校

今回は二度目のインターハイ出場ということで前回の反省を活かし準備をしてきた。しかし、緊張と焦りからテストで思うような結果が出ずチームの足を引っ張るような形になってしまった。高校生活で最後の大会に悔いを残すことになって非常に残念だった。

今回の会場である新潟は気温が低くてとても過ごしやすく、またとても景色の良い山々があり、快適で楽しい登山ができるコースだった。高校最後の登山を飾るにはとても満足できる山だった。

（砂川　大喜）

高校最後の山行となったインターハイは充実したものだった。入賞を目指し、２年半の全てをぶつけたつもりだったが、やはり全国の壁は厚くそして高かった。緊張から覚えていたはずのことも思い出せず、テストでは失敗してしまった。しかし、読図や記録など去年ミスが目立った項目で挽回することができたことが成長だと思う。たとえ僕たちが、あまり良い成績でなくとも、後輩たちに伝えていくことによっていつかこの学校が１位を狙えるレベルまで達してくれれば十分だ。麻溝台高校の挑戦は終わらない。

（林　達也）

高校生活最後の山行でもあるインターハイが終わった。体力的には問題無く歩きとおす事が出来て満足しました。でもテント設営や、自然観察のテストなど技術的な面ではまだまだ未熟な所もあったので後輩には今回の失敗の経験を活かしてがんばってもらいたいです。そして今回登った新潟の山の感想としては、神奈川の山と比べて涼しくて登りやすいと感じました。特に苗場山コースの苗場山の頂上は寒いくらいでした。今回のインターハイからいろんな事を学んで、それを次の代に伝えていってほしいです。

（望月　直樹）

初めてのインターハイを通して、全国のレベル

を知った。特に自分は、テストの重要さをまじまじと実感した。上位になる高校はどこも満点に近い点数だった。それなのに自分達は、点数を落としてしまった。自分には、来年があるので、後輩達に今回の失敗をふまえて様々な技術を伝えて、インターハイで入賞できるようなレベルまで鍛えて、大分のインターハイに戻ってきたいです。そして新潟でのインターハイの感想は、多くの関係者によって成り立っていることが分かった。無事に大会ができたことに感謝したいです。

（篠﨑　祐弥）

Ａ隊１班　愛知県　旭丘高等学校

僕たちはチーム全員２年生で大会初出場ということもあり緊張の中からインターハイが始まりました。そんな僕たちを迎えてくれたのは地元の小中学生のすばらしい太鼓のアトラクションでした。そのおかげか幾分か緊張をほぐして各テストに臨むことができました。県大会とは少し雰囲気が違い殺伐とした空気でしたが、いつも通りの力を出せたと思います。

その後の苗場プリンスへ移動してからの設営審査では他校の手際の良さに驚かされながらも慌てることなく設営を終わらせることができました。調理については事前に一度作ってみるべきだと改めて思いました。また、他校のさまざまな料理のレパートリーは今後の我が校の山行の参考になりました。

２日目の平標山コースは思っていたよりも歩くペースがゆっくりで、少し拍子抜けしてしまいました。しかし、そのおかげでじっくりと山の景色を楽しむことができました。特に一ノ肩へ向かう木道のお花畑が印象的でした。ガスの影響で頂上からの景色を見ることができなかったことだけが残念でした。平標山の家から下り、林道に出合ったところでのサンプリングはただただ嬉しかったです。

３日目の苗場山コースはサブ行動だったので行程が長い割には楽でした。チーム行動スタート時の各校の勢いは県総体を彷彿とさせましたが、それ以外は快適な登山でした。雲尾坂の危険個所で急にペースアップしたこと以外はサクサク登れました。急登が終わってすぐは苗場山の湿地帯を眺めることができましたが、休憩に入るとガスが出てきた景色を見ることができず非常に残念でした。ただ山頂付近にあったニッコウキスゲの美しさは今でも覚えています。

最終日の三国峠コースは一度下見に来ていたので見覚えのある地形が何度も見られました。中でも神社を通過してしばらく歩いたところの左右が開けた木道は気分爽快でした。

このインターハイの３泊４日の間、とても快適に山を楽しむことができました。ただ、あまり頂上からの景色を楽しむことができなかったので再び新潟に来て平標山や苗場山、今回は登っていないですが仙ノ倉山にもチャレンジしたいと思います。最後に、この素晴らしい舞台を用意してくださった皆さん。本当にありがとうございました！

Ａ隊１班　和歌山県　田辺高等学校

今回の大会で歩いた平標山コース、苗場山コース、三国峠コースの３つのコースはいずれもとてもすばらしく良いコースだったと思う。これらのコースは和歌山の山とはちがい、標高の差もあるが、８月とは思えないようなすがすがしく涼しい風が吹いており、登山道も木道や木の階段がよく整備されており、登りや下りも楽だったように思う。また平標山コースでは急な斜面に、ピンクや黄色、紫色など色とりどりの花が咲いていてその美しさに疲れを忘れるほどだった。苗場山では、雲尾坂を登りきった後に突然現れた広大な山頂に広がる高層湿原の幻想的な風景に圧倒された。三国峠コースは、前の２つのコースにくらべると、目立った地形や美しい花々は無かったが、上杉謙信や弘法大師などが越えたという三国峠に立った時には何ともいえない気分になった。

幕営地の苗場プリンスホテル前幕営地ではテントで寝る時には下の芝生がやわらかく、とても寝ごこちがよかった。サンプリングでは、氷でよく冷やされたジュースや水などを飲め、また役員の人もあれこれとお世話をしてくれたためとても快適だった。

今回僕たちは初めての全国大会出場で、全国へ行くとなった時、どのようなきびしい生活をしないといけないだろうかと思っていたが、いざ始まってみると、審査や基準は厳しくなっていたが、テント泊している時には、県総体では考えられな

いようなサンプリングや役員さんなどが色々お世話してくれたりと手厚いサポートをしてくれた。

この大会では、結果や順位が出るが、そんな得点がかりを気にすることなく新潟の山を楽しみ、高校生活最後の登山を満喫していい思い出をつくることができたと思う。また、これから大学生、社会人と生きていく中で山に登る機会はあるだろうが、そんなときはこの大会で学んだことを活かして登山できるようにしたいと思った。

Ａ隊１班　岡山県　岡山操山高等学校

思い返せば、僕らは「笑いの絶えないパーティー」だった。三年三人二年一人とバランスこそ悪いが二年の彼は精神的負担をもろともせず僕らを楽しませてくれていた。この大会を通してそんな仲間たちや山からたくさんのことを教わった。仲間を大切にすること。自分たちは実は多くの人に支えられていること。僕ら三年は今年で引退だが、次の世代に期待したい。彼らも「笑いの絶えないパーティー」をつくってくれることを。

一歩。この大きさをこれ以上ないぐらい知ることのできる競技が登山であったと三年間を振り返って思う。日々の一歩により山に備える。一歩ふみ出すことにより山に登る。この繰り返しが自分達をこの大会に導いてくれたはずである。メイン行動・サブ行動、ともにそれほど短くないルートであったが、それを無事のりこえることができたのもそれのお陰だと思っている。この一歩の大きさというものは今後の人生における大きな収穫であった。

今回の苗場山は私達三年生の有終の美を飾るにふさわしい山であったとしみじみと感じている。湿原へ出るまでの急登から見える名も知れぬピークや峰々によって私の世界観は狂い始める。そして時折吹き上がってくる冷涼な風により気持ちは上向きになり更に地に足がつかなくなっていく。ついに登り切り頂を目にすると同時に私は幻想への扉を開き切る。そこは頂上というには広すぎ、台地というには高すぎた。草がどこまでも続き、空気は澄み切っている、急登中にかいた汗はこの瞬間にどこかへ消え去り、目はくらみ今までの自分が知っている地形のなにもかもとも一致しない。あえて二度言わせてもらうならばそこはまさに「幻想」なのだ。私にとって最も印象深いＩＨはこの一連の事象であった。

登山競技は、先輩の背中を追いかける、また先輩に背中を押してもらう、ということが物理的に起こる競技だと思う。練習では必死に先輩の背を追い、大会では背を押されながら歩いてきた。先輩との実力差にプレッシャーを感じながら挑んだインターハイだったが、下見を含め十日間という長い期間を経て、やっと「チームの一員」になれた気がする。今回の大会で得たものを活かして新チームの軸になれるよう努力し、次につなげたい。

Ａ隊１班　熊本県　熊本高等学校

苗場山、平標山共にすばらしい山でした。気候も大変気持ち良く最後のインターハイを快く終えることができたと思います。しかし、本地図のゴンドラは緑の線ではなく赤の線にして欲しかったです。断面図を書く際に担当の者はゴンドラを書くべきか困惑しておりました。しかし、その他に不満点はありません。ありがとうございました。

今回のインターハイでは気候にも恵まれ、とても気持ちのよい大会生活を送ることができました。行動中は新潟の山の自然に触れることができました。特にお花畑や湿原の植物はすばらしかったです。また、チーム行動時のタイム設定も無理のないもので、ゆっくりと山を楽しむことができました。本部の皆さんのおかげでとても快適な大会になったと思います。本当にありがとうございました。

天候にも恵まれ、すごく楽しむことができました。行動もスムーズに行うことができ、本部の皆さんの苦労が伝わってきました。本当にありがとうございました。パーティー行動も無理のない時間設定で苗場の山をゆっくりと楽しむことができました。ただ気持ちとしては苗場の山頂での時間をもう少しのばしてほしかったです。おつかれさまでした。

今回のインターハイでは、役員の方々の支援のおかげもあって、極めて快適な天幕生活を送ることができ、新潟県の山々を満喫することができて、大変有意義なものとなりました。しかし、あえて苦言を呈させていただきますと、Ａ３のコースのスタート＝かぐら第１高速リフト乗り場間のパーティー行動は、班行動でも問題なかったと思います。タイムレースではないと強調しながらも時間設定を設けて、徒に選手の焦燥感を煽ってしまうくらいなら、最初から班行動で行くべきと思いました。加えて、山頂付近の湿原を充分に歩けなかったのが心残りです。龍ヶ峰辺りまで行くのも良かったと思います。また、私的な感想ですが、終始周囲の高校に悪態をついているパーティーがあり、非常に不愉快でした。同じ大会参加者として恥ずかしく、自らの行いを省みる良い機会にはなりましたが、誠に勝手ながら、マナー点は会話の音量のみならず、その内容もある程度は考慮すべきではないかと考えました。それでも、大会全体としては、前述の通り役員の方々のおかげで素晴らしいものになりました。大会に参加し、協力してくださった役員の皆様、本当にありがとうございました。

Ａ隊２班　宮城県　白石高等学校

新潟で行われました今回のインターハイ、初めはかなり暑いことが予想されたので、練習でも暑さ対策に重点をおいていました。しかし、実際に来てみるとそれほど暑さを感じることもなく快適に山行することができました。歩くペースや休憩の回数もどのチームにも無理のないもので、体力的には余裕でした。そのため、体力点で差がつかないようにも思われました。最後に一言“ありがとう！！”

新潟に来たのはインターハイの６日前の８月１日。新潟は白石よりも蒸し暑く感じられた。最初に下見をしたのは平標山だった。平標山から見える稜線はとてもキレイだった。次に苗場山を下見し、苗場山山頂の景色は独特で今までに見たことがなかった視界が広がっていた。三国峠は正直覚えてません。また機会があったら新潟の山に登りたい。最後に一言言わせて下さい。“ありがとう！！”

新潟で行われた今回のインターハイは天気にも恵まれ、非常に歩きやすく快適な大会となりました。僕は三年生なので今回が最後の大会でもあり、最後の山歩きとなったのですが、良いコンディションに恵まれて今後も残る思い出をつくることができました。大人になってこの思い出を思い出した時、コース隊長が言ったようにもう一度新潟の山々を登りたいと思います。最後に一言だけ言わせて下さい。“ありがとう！！”

私は山岳競技というものに疑問を感じている生徒です。この疑問を持ちながら、２年間と少しを過ごしてきました。しかし、今回のインターハイは自分の中ではとても楽しめた大会でした。なぜかといえば、色々な出身地の人達が集まり、交流ができたからです。色々なことを、色々な人から得られたと思います。また、総監督という存在も大変心強いものでした。最後になりましたが、一言だけ言わせて下さい。“ありがとう！！”

Ａ隊２班　栃木県　大田原高等学校

今年のインターハイは、私にとって昨年の青森大会に続き、2度目の大会であり、昨年の悔しい思いをバネに変えて望んだ「再戦」であった。昨年は、初めてと言うこともあり、全国のメンバーに圧倒され、いろいろな場面で失敗をし、練習の成果を全く発揮できずに、終わった大会であった。今年は昨年とは違い、燃え上がる気持ちからの緊張、武者震いのような感覚で大会を迎えた。開会式の選手紹介で、「栃木県」のアナウンスが流れると、「やるぞ」の思いがなおいっそう高まってきた。各県のメンバーを見ても、みんな真剣なまなざしで、私もいっそう頑張らねばという気持ちにさせられた。その後始まった競技、昨年とは違い、少し余裕を持ちながら行動でき、自分たちなりに順調に進んでいった。事前に練習してきたことを十分に活用しながら、4人で団結して事を運ぶことができた。多少の失敗があっても、「次に生かそう」という前向きな気持ちで行動することができた。また、今大会は、天候に恵まれ、登山行動はもとより、テン場でも生活も快適で、全国の仲間たちとの交流もでき、すごく充実した4日間であった。迎えた閉会式。4人とも勝利を願っ

たが、結果は 19 位。入賞まであと 2.2 点、優勝まで 4.6 点であった。昨年とは違い、この大会にかける思いが強かっただけに本当に悔しかった。点差はわずかではあるが、全国の山仲間たちのレベルの高さを実感させられた。そんな悔しさの中で、先生から「おまえたちはよく頑張った。よくやった。」と声をかけてもらい、悔しいながらも、「ありがとうございました。」という言葉が心の中に浮かんだ。一緒に頑張った仲間にも、「ありがとう」の気持ちでいっぱいになった。家に帰ると家族から「よく頑張ったね。」の言葉。友人からの「お疲れ」のメール。私たちは、本当に多くの人に支えられて、この大会に参加することができたことを実感し、結果は良くなかったが、4 人で一致団結できたこと、全国の仲間たちと一緒に山登りができたことを誇りに思え、充実感でいっぱいになった。今会の大会は、昨年の悔しさをはらすことができなかったけれど、決して「悔しい」という思いだけで終わる大会ではなかった。「人の支え」という普段では決してわかることのない、いつもあるけれどとても大切なことに気づけた価値ある大会となった。　（文責：比企史明）

Ａ隊２班　富山県　富山高等学校

今回の 2012 年北信越かがやき総体は自身にとって初のインターハイ参加となりました。

今回のインターハイでは、北は北海道、南は鹿児島まで、全 46 都道府県全 47 パーティーの参加となりました。開会式においては、「これから始まる、5 日間の過酷な日程を、乗り切って、更に他県のパーティーと競い合って、華々しい成績を残そう」と、いったような選手たちの、緊張感がひしひしと、伝わってきました。またこの式では、地元の方々の太鼓の演奏などもあって、私たちを暖かく、歓迎して下さったことは、辛い日程を乗り切る力になりました。

二日目から諸審査が開始されました。全体を通して登山行動については、これまでに、ランニング、ボッカのトレーニングを積んできたにもかかわらず、自分と前の隊員との間に山行中にしばしば間隔が空いてしまうことが多かったです。体力点の損失の多くは自らによるものだと自覚して自分のトレーニング不足について後悔が残りました。そして、自分が担当した、食料計画については、概ね成功を収められたので、懸命に、取り組んだ甲斐が、ありました。

パーティーメンバーとのテント生活を通じては、ともに一つの目標の達成を目指しての生活であったので、4 人の一体感、信頼関係が、より一層の深まりを見せ、充実した日々となりました。

今回の 2012 年北信越かがやき総体では、私たち選手は新潟の雄大な自然に囲まれた中での日々をすごしました。その日々の中では例えば、山行中の辛い急登や下り坂、変化に富んだ天候などの厳しい自然からの試練を受ける時もありましたし、また山頂での雄大な景色や、美しい様々な高山植物を見られたといったような自然の美しさに触れ合えるひとときもありました。

このような素晴らしい環境の中で、全国の質の高いライバル達と、共に争い、親交を深められた最高の経験は、自分の一生の誇りとなって、胸に焼き付いています。将来またこの、素晴らしい南魚沼の苗場の地に戻ってきたいです。

（清水航大）

４日間に及ぶインターハイ登山競技が終わり、まず思ったことは、山と大会関係者の方々に対する感謝とそして順位に対する悔しさでした。

３日間の登山行動、テント泊、炊事、美しい景色、その他いろいろ、多くの貴重な経験を積むことが出来ましたが、これらの経験も多くの関係者の方々の協力、美しい苗場の山々があってのことです。これらは私にとって順位と同じくらい大切なことです。よってこれからも感謝の気持ちを忘れずにいたいです。

多くのことを学んだ本大会でしたが、順位については多くの課題を残す残念な結果になってしまいました。他校との実力差を思い知らされ、日々のトレーニング不足を痛感しました。審査で減点される＝安全な登山が出来ていない、だと思っているので悪かった点を改善し、またよりいっそうの体力強化に努めたいです。

残念な結果に終わってしまった本大会でしたが、そのときの経験したこと、学んだことこれからの「登山」に生かして生きたいです。

（豊嶋　裕太）

私にとって初めての全国大会となる今大会は、自分たちの力がいかにちっぽけな物かという事

を教えてくれた。

今回、富山高校は三十八位。昨年と較べても十は下回る成績である。この結果は私に少なからぬ危機感を持たせている。

山岳の大会の順位とは、すなわち登山行動の安全性を競うものである。詳細をみると、体力で大きく点が引かれていた。

県体で大変お世話になっている先生が以前、こう仰っていたのを思い出す。

「山岳競技において、技術面は確かに大切だが、僕は何よりも体力を大切にしてほしいと思う。体力にゆとりを持つことで、思考にゆとりができる。思考にゆとりが生まれれば、無駄な怪我をしないで済む。登山というのは体力を気合いで補うことが出来ないんだ。」

山岳競技ほど、途中での棄権が難しい競技は、少なくともインターハイにおいては他に無いだろう。些細な怪我が大きな事故に繋がりやすい登山において、個々人の体力、スタミナはその人の生命線とも言えるのではないだろうか。

私にとって、登山は今回が最後ではない。これからも、幾度となく山に挑戦し続けるだろう。わが校では、秋には剣岳に合宿に行こうという案まで出ている。安全な登山を行うためにも、これからも体力の強化を怠らないようにしたい。

上には反省を述べたが、楽しかったことも多かった。

インターハイほど大規模な大会に参加するという経験は、上にも書いたように始めてのことで、下見登山を含めてほかの部員達と共に山に登るのは、とても楽しかった。

また他県から来る選手との交流も貴重な経験になったと思う。昼食や夕食をほかの学校はどんなメニューを考えてきているのだろうか、あそこの学校の夕食は是非とも一度真似してみたい、この学校の企画書はとてもユニークだ。思わず感嘆してしまう所が幾つもあった。

来年、私は三年生となるので、大分で行われる大会に出場できるかは、いまの所分からない。しかし、出来ることならもう一度、あの場所へと戻りたい。また、来年二年生となる後輩の一年生、そしてまだ見ぬ新たな新入生にも、インターハイという大きな場に立ち、かけがえのない経験を得て欲しいと思う。

（古本　雅之）

山登りすなわち山岳競技とは、他と競い合うものでなく、主に自分との戦いだと私は思っています。このインターハイで私は、自分の甘さを感じ、ペーパーテストの自分の勉強不足などを後悔したりなどして、まだまだ自分との戦いに打ち勝ってはいないことを実感しました。

インターハイの審査の結果は、酷いものでした。富山高校三十八位という昨年に比べ、十位以上も順位を落としてしまいました。特に自分が駄目だと思ったのは、体力審査とペーパーテストです。体力審査では５点近くも引かれてしまいました。考えられる理由は、チーム内でメンバーが離れすぎたことだと思います。もちろん、体力そのものももっと強化しないといけないと思いました。また、ペーパーテストでは全体的に点数が悪く、勉強不足であることが一目瞭然でした。北信越大会までとは問題のレベルが大きく違い、インターハイのレベルの高さを思い知りました。また、記録書でも、完璧に書いていたとおもったのに、点数をとれておらず、詰めが甘かったと思いました。これらの悪かった項目は、トレーニングをし、次からの登山で気をつけて、改善していきたいと思います。

審査の中では意外と高得点を取れた項目もありました。設営審査と炊事審査と計画書です。設営審査と計画書は前日までの努力の甲斐あってか、満点か満点に近いものがとれました。炊事審査では満点を取れ、主にリーダーの考えたクスクスが良かったのだと思います。このような良かった点はこれからの登山でも生かしていきたいと思います。

インターハイでの講演で、先生は山岳では「生きる力」を養うものだとおっしゃられましたが、私はまさにその通りだなと思いました。山岳競技では緊急時に使えることを多く学べます。まさに生きるための力です。私は、これらの知識、経験は今、山岳部にいるときがもっとも学べるものだと思います。私はこれからもっと「生きる力」を養い、日々の登山をしていきたいです。またこの大会は、様々な人たちの協力によって成り立ったものです。その人たちや、山への感謝を忘れずに生きていこうと思います。

（湊山周平）

Ａ隊２班　兵庫県　柏原高等学校

この大会を通してさまざまな事が学べたと思います。大会初日では、開会式で小学生が太鼓の演奏をしてくれたし、設営隊の方々がたくさんいる事もわかり、今回の大会でさまざまな人が関与してくれている事がわかりました。班ごとの交流会もあり、さまざまな都道府県の生徒と関わる事もできました。知識のテストでは、広い館内で全国大会であるという事もあり、とても緊張しましたが、貴重な体験でもあったと思います。幕営審査でも、県大会とは違う雰囲気があり、とても緊張しましたが、時間の余り、冷静に幕営ができて良かったです。個人的には初めて経験する「サンプリング」がうれしかったです。冷たい飲み物は、すごくおいしくて、登山のつかれも、ふっとびました。幕営地も草原だったので、寝心地が良かったです。大会２日目は、初めての登山行動で、平標山を登りましたが、隊行動で大人数の登山で、班ごとに班長と副班長がいたので、全国大会に来ているという実感が沸いてきました。あいにくの霧雨で景色は見えませんでしたが、なんとなく充実感があり良かったです。２日目も幕営審査がありましたが、前日よりは冷静に幕営ができて良かったです。この日は温泉に入る機会があり、とても良かったです。汗も流せてこの日はぐっすりと寝ることができました。３日目は、サブザック行動でした。最初の 60～90 分の登山行動では、どの県の学校もわりと早いペースで歩いていたので、さすが全国大会だと思い、少し驚きました。この日は苗場山に登りましたが、僕は下見に行っていなかったので、山頂の広い草原に出た時にびっくりしたし、霧がかっていてきれいでした。この日はやはりドラゴンドラが一番楽しみでした。僕は運よく前の席で、外の景色を見ることができました。山もですが、湖や沢の水もとてもきれいでした。途中で熊も木彫りや、反対側から来るドラゴンドラに乗っているパンダも見る事ができ、楽しい気分になれました。大会４日目では三国峠を登り、策に山まで審査員が多く緊張しましたが、それ以降は気楽に登る事が出来ました。最後の解散式では、設営隊や審査員や大分県の高校の監督のあいさつもあり、そして陰ながら僕たちを支えてくれた自衛隊の人達のあいさつもあったので、改めてこの大会ではたくさんの人達の支えがあって成立しているものだという事がわかり、とても良い体験になったと思います。

Ａ隊２班　香川県　観音寺第一高等学校

今回の大会は、初日の平標山は天候が良くなく、景色はあまり見れませんでしたが、その後の苗場山・三国峠は天気も良く、景色を楽しみながら歩くことができました。また湯沢の町は涼しく、水もきれいで幕営も気持ち良くできました。山行では、ペースが遅いかなと思ったけれど定点や景色を見ることを考えた時には、ちょうど良く、一度も離脱することなく歩くことができました。トイレが良い所になく、どこも最初と終盤だったので、中盤に腹痛がきて大変でした。インスペトや定点もこれまでしっかり勉強してきた成果が出せたと思います。テント設営も山行後の審査も初めてでしたが、ミスも最小限に時間内にすることができました。最後にＩＨに来て、同じことをするにしても各県によって様々な違いがあり、一つ一つが新鮮でプラスになることばかりでした。３年のメンバーはこれで高校生活の山行も終わりますが、是非１・２年の後輩にも来年の大分ＩＨに来てほしいと思える大会でした。どうもありがとうございました。裏面の存在に気づいていなかったので、今回登った山の感想を書きたいと思います。１日目の松手山経由平標山コース。あいにくの曇りでしたが、そのため涼しかったです。メインザックのため鉄塔にして松手山に行くまでが辛かったです。何よりも花の百名山として有名な平標の花畑や稜線の絶景を見れなかったのが残念です。シモツケソウしかわからなかったので、いつか再び来る時は、もっと勉強してから登りたいです。２日目そしてメインの山である苗場山。基本は晴れていましたが、山頂はガスが充満していて重要湿地５００にも選ばれている広大な湿地を十分には見れませんでしたが、めったに見ることのできない景色を楽しめました。３日目は三国峠・三国山を中心とした昔の人々が通った道を思い浮かべながらの山行でした。とにかく最高の晴天で暑くて暑くて仕方ありませんでした。でも今大会で一番周りの山々の雄大な山並みを見ることができて良かったです。細やかな登り降りで、これまでの疲労もあり、思っていたよりハードな行程でメンバー全員ヘロヘロになりました。しか

し、いつか大会とは関係なくゆっくりと登りたいと思う山々ばかりでした。あとサンプリングは本当に助かりました。

Ａ隊２班　福岡県　福岡高等学校

本年度のインターハイは、涼しい環境の下、楽しい登山、テント生活を送ることができた。幕営地となった苗場プリンスホテルは、冬は多くのスキー客で賑わうゲレンデということもあり、テント設営もスムーズに進み、夜も涼しく、睡眠を十分にとることができた。水場、トイレ、平標山のあとの入浴場も使いやすかった。

２日目の平標山コースは、メイン行動での平標山山頂までは、きつい登りもあり苦しかったが、山頂を過ぎると下りが続いて歩きやすかった。ただ、山頂付近は雲に覆われていて景色が見えなかったのは残念だった。

３日目の苗場山コースは、サブ行動で行動しやすかった。最初のチーム行動は緩やかな登りで、時間設定にも余裕があったので時間内にゴールすることができた。富士見坂と雲尾坂の間の花畑では、ミヤマアキノキリンソウ、タカネナデシコ、ニッコウキスゲ等の九州では見られない高山植物をたくさん見ることができた。雲尾坂からの上りは岩に手を置きながら慎重に進んでいった。今大会最もきつい場所だったが、無事に登ることができた。きつい登りを終えると、見たことのない高層湿原が広がっていてとても感動した。最後のドラゴンドラからの眺めも素晴らしかった。

４日目の三国峠コースは、前の２日間と比べて登りやすかった。この日は晴れていたので、２日目の見られなかった景色を見られたのでよかった。

こうして、無事インターハイを終えることができた。結果は思っていた通りにはいかなかったが、やることはやったので悔いはない。ここまで来られたのは、部員の皆、先生方、先輩、ＯＢの皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。

（谷倉　快）

ここ数年、福岡高校登山部は成績不振でした。さらに今年はおそらく歴代最低レベルで、インターハイどころか九州大会も厳しい状況でした。部員もギリギリの５人・・・・のはずがいつの間にか１人減っていました。はっきり言ってどん底でした。しかし、そこから巻き返しインターハイ出場。当の本人である私たちも開いた口が塞がらないほど、本当に驚きました。

インターハイでは天気図と読図を担当しました。天気図は初のインターハイということもあり、とても緊張しました。等圧線がガタガタでした。読図は満点で自分は神だと思いましたが、満点のチームが他にもたくさんいて驚きました。

結果的には物足りない結果となりましたが、日本百名山にも入る苗場山系に登れたことは一生の財産です。また、今年定年を迎えられる森山先生をインターハイに連れて行くことができて良かったです。そして、サボり魔ながら皆をまとめた谷倉君、成績優秀ながら部活では一番のアホキャラの竹中君、唯一の２年生で一番の毒舌キャラの村岡君、顧問の岩崎先生と森山先生、応援してくれた学校のクラスメイトや先生方、ＯＢの方々など私たちに協力してくれた人たちにお礼を伝えて終わろうと思います。ありがとうございました。

最後に一言。登山は競うものではなく楽しむものです。これが私がインターハイで一番学んだことです。それを後輩は忘れずに！

（野寄　泰平）

オリンピックや甲子園で盛り上がっている夏休み。そんな中、僕たち登山部は新潟県の山の中にいた。誰がこんな夏休みを想像していたのか・・・受験勉強に励むはずの夏休みが山一色の夏休みへと変わった。しかし、受験勉強では得られないものをたくさん得ることができた。登山で培った精神力、景色、植物、昆虫、おいしい食事、さらには全国の仲間たち、そしてみんなの笑顔・・・自分は大きく成長できたと思う。

そもそも僕は入部当時、インターハイなど考えてもいなかったが、いろいろ挫折を繰り返して、仲間と喧嘩をしながらも仲を深めていって、いつの間にかインターハイに出ていた。まさに漫画のようなストーリーだが、ここまで来られたのは僕らを支えてくれた皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。

（竹中　章太）

僕は一年半前登山部に入りました。最初はきつ

くて辞めたいと思っていましたが、だんだんと楽しくなってきました。また、大会を経験するごとに上を目指すようになり、九州大会、そして念願のインターハイ出場を決めました。ここまで来られて本当に嬉しかったです。インターハイでは救急のテストでいい点数が取れて、自分の役割を果たせてよかったです。

最後に、お世話になった先輩や先生方、ありがとうございました。

来年は春や夏に合宿でよく行く大分県のくじゅう山系でのインターハイに出場できるよう、先輩方に負けない、新しいチームを作っていきたいと思います。これからもよろしくお願いします。

（村岡　健夫）

Ａ隊３班　青森県　八戸工業大学第一高等学校

今大会では、平標山・苗場山・三国峠の３コースを回りました。平標山は、花の１００名山に認定されておりとてもきれいでしたが、天候が悪く美しい景色が見ることが出来ずとても残念でした。苗場山コースでは、不安定な天気で曇りがちでしたが、山頂では美しい湿原や山々を見ることが出来とても良かったです。三国峠コースでは、天候に恵まれ澄みわたる青空の下、登山をすることが出来とても良かったです。さらに、平標山コースでは見られなかった美しい稜線や景色を見ることが出来非常に感激しました。

幕営地では、設営隊の方々のご配慮で快適に過ごすことができました。そして、ドラゴンドラから見た景色は今まで見たことのないような雄大な山々や川のせせらぎと二居湖の美しさを眺めることができ、スリルも味わうことが出来とても楽しかったです。

苗場山コースのチーム行動では、もう少し先頭の副隊長が選手から離れて歩いたほうがいいと思いました。狭い道になる和田小屋からの木道のところで混雑し、押されて木道から落ちてしまい隊に戻ることが困難でした。副隊長が先にいけば、来た順から並ぶことができて混雑もなくスムーズにいけたと思います。結局は、誰かの後ろに着いていくことになってしまっているので隊行動と変わらないです。来年のインターハイでのチーム行動では、このような事が起こらないようにして欲しいです。隊長はじめ今大会で関わってくださった方々のお陰で楽しい大会になりました。全国の山仲間とも知り合いになりありがとうございました。

Ａ隊３班　埼玉県　正智深谷高等学校

もうひとつの登山

私たち４人は埼玉県の代表として初めてインターハイに出場しました。県のインターハイ予選では、他校と競い合う登山はしてきませんでした。自然を満喫しながら山に登る、それが予選会であり、登山のスタイルだと思っていました。登山に点数や順位を付けない埼玉方式のような登山は全国でも珍しいと聞き、正直私たちは驚きました。もちろん、私たちも埼玉県の他校と同様に、インターハイ出場が決まるまでは、競技登山をしたことがありませんでした。インターハイでは初めての登山スタイルを経験できました。

私たちの学校はインターハイに行くのは初めてだったため、監督の先生も選手も手探り状態で準備を進めてきました。大会本番は記録書を書く時も読図をする時も、監督の先生に相談することもできなかったので不安でした。幕営審査も炊事審査も初めての経験だったので、自分たちだけでうまくできるか不安でした。

幕営最終日の就寝前に監督の先生とミーティングをしました。大会前は怒ってばかりいた先生が、優しく私たちに声をかけてくれました。大会直前の夏合宿では槍ヶ岳を東鎌尾根から登りました。大会直前はコースの下見しかしていない学校が多い中、先生は５人で行く最後の登山として槍ヶ岳に連れて行ってくれました。「みんなは槍ヶ岳に登っているのだから、自信を持て！」と先生の力強い一言。「明日は 4 人で登る最後の登山だ。みんな好きなように思いっきり山を楽しんで来い！」私たち現役最後の先生の言葉でした。

結果はリタイヤした２校を除くと最下位でしたが、何よりも私たちは埼玉県で登山をできたこと、そして監督の先生の下で登山を楽しめたことを誇りに思っています。インターハイという全国の舞台で、今まで経験したことがなかった競技登山を通して、それまで当たり前だと思っていた登山という宝物を再発見する機会となりました。

Ａ隊３班　新潟県　長岡大手高等学校

今回の新潟インターハイ、苗場山や平標山、三国峠での登山を終えて、自分の高校生活最後を飾る登山としては最高の登山だったと思います。１年生のときのインターハイでは、３年生の先輩に付いて連れて行ってもらいましたが、まだ登山のことについて全然知らなかったので先輩に任せっきりでした。そのことは、自分にとってとても悔しいことであり、恥ずかしいことでした。ですが、その反省を経ての２年生、３年生での登山は楽しかったです。そして、新潟インターハイでは、この３年間の集大成となりました。本当に登山部に入って良かったです。

（貴島　輝）

新潟インターハイでの僕達の反省点は、歩行が安定しないということでした。他県の選手達は、湿った岩場や急な斜面でもバランスを崩さず、歩行が安定していて驚きました。僕達は歩行中にスリップして転倒することが多かったし、下りのときに歩行が安定せず、前のパーティーに遅れることがありました。登山で歩行中の転倒は怪我や滑落の原因となるので、日頃から歩行練習をすべきだと思いました。僕はこれで引退となりますが、１・２年生にはもっと歩行の安定性を高めてもらいたいです。

（白川大暉）

今回、僕は３年生として初めてインターハイに出場しました。僕は中学のときも運動部でしたが、上位大会は雲の上の存在で高校でもそうであろうと考えていました。登山部に入部してインターハイの可能性が見えたとき、この部活に命を懸けようと思いました。楽しみよりもスポーツとして登山をしてきました。しかし、実際にインターハイで苗場山や平標山を登っていると、花や太陽が目に入ると自然に笑顔になり温かい気分になりました。これが山登りの本当の幸せなんだなと、すべてが終わった今、気付けました。

（天野　輝）

今回、私は初めてインターハイに出場し、全国の代表と山登りをするという貴重な経験をすることができました。３泊４日という日程はなかなかハードな日程でしたが、チーム全員で楽しく過ごすことができました。今回が３年生と登る最後の山となりましたが、とても寂しく思っています。これからは、３年生から受け継いだ様々なノウハウを生かして、次につなげていきたいと思います。今回のインターハイは一生忘れることのないものになりました。このような機会に恵まれたことにとても感謝しています。

（佐藤慎也）

Ａ隊３班　京都府　洛星高等学校

今回の全校高等学校登山大会では、たくさんの素晴らしい山の仲間が増え、また一生忘れることのできないような貴重な体験ができ、とても濃い時間を過ごすことができたと思う。しかし、大変食いの残る大会となってしまったのも事実であり、そこが唯一心残りではある。

洛星高校山岳部は、学校創立当初からあるクラブなのだが、部が途切れ途切れで、先輩との交流は皆無である。そのため情報量が少なく、大会がどういう形態で行われ、どういった審査をされるのかということも部報を読むこと以外に知る術がなかった。正直言って、メンバー全員が大会のコンセプトをつかめていなかったと言っても過言ではない。これが原因でいざ大会本番となると、直前の FAX をもらっていなかったせいで膨大な範囲を勉強してしまい点を失ったり大会の審査における”コツ”を知らないまま行って点をあちこちで落として、チームの雰囲気はますます悪くなり.....というような悪循環に陥ってしまった。けれどもここで終わりではない。幸い、メンバーは全員高２である。志望校現役合格ができるくらい、来年の夏までに成績を上げておけば来年の大分大会にも出場できる。次につなげることができた大会なのではないかと私は思う。

大会結果は決して望ましいものではなかったが、私がとてもよかったと思うことは、たくさんの、また全国規模で山の仲間が増えたことである。連絡先を聞かなかったチームの人も「いつか山で」と言って別れることができた。私はこういう山での一期一会の出会いというのがなかなか好きで、これも山に魅かれる一因なのかなとも思う。しかし、一つこれについて残念なのが、仲良くなれた(特にＡ隊において)のは主に閉会式の日で、あまりじっくりと話すことができなかった。競技を意

識しすぎるあまり、戦闘モードになっておられた人も少なくなかった。交流会を増やし、もう少し大会側からも他チームと話す機会を作ってほしいと思った。山には本来競争がない。仲間とともに頂上に立って喜びを分かち合うのが本来あるべき姿だ。そういう面も忘れず大会を開催してほしい。

最後になるが、一人山岳部だったこの部活に、素晴らしい仲間ができて最高の舞台に立ててよかったと思う。仲間全員に心から「ありがとう、お疲れ様」と言いたい。また大会を支えてくださったすべての方々に感謝したいと思う。
本当にありがとうございました。

Ａ隊３班　島根県　松江北高等学校

昨年のＩＨで感じた自分の力不足をいかにして補い、力をつけるかを考えてこの一年間やってきました。山を楽しむことが第一ですが、昨年の悔しさがあり、順位にこだわる自分がいました。そんな中で改めて山の楽しさを気づかせてくれたのは今大会の苗場山を始めとする美しく険しい山々でした。昨年の反省を活かし、体力をつけたから登りきることができたと思います。ですが、それだけでなく、最高の仲間がいて、いつでも支えあってきたからこそ登り切り楽しむことができたと思います。本当に頼りないＣＬでしたが、パーティーメンバーや他の部員皆の支えがあって、やり遂げることができたと感じています。今まで登山を続けてこれたことに感謝しています。ぜひ後輩たちにもＩＨでしか味わえない大舞台の独特な雰囲気や楽しさを味わって欲しいと思います。

（平塚　寛隆）

今年は、昨年の青森ＩＨと比べてかなり楽な登山行動であり、景色を楽しむ余裕もあった（登頂時のよい景色を眺めるのは、私にとって登山で一番好きなことだ）。しかし、私は、そのような美しい景色を与えてくれる自然への恩返しは全くしなかった。山行三日目、登山道でゴミを見つけても、ただかがむだけの動作なのに、足・肩の痛みを理由に、（本当は「取るのが大義だ」と心のどこかで思いながら）放置した。そんな自分が恥ずかしくてならない。高校卒業後の登山では、自然保護にも気にかけて登山をしようと思う。

（吉岡　祥平）

昨年の青森大会に引き続いての二度目のインターハイ出場でした。前回の青森大会ではインターハイの厳しさを痛感し、今回に向けて負荷の大きい新メニューに取り組んだこと、比較的ペースの遅い隊・班行動が多かったこともあり、楽しく登山ができたと思います。平標山ではガスで景色が見えず残念でしたが、苗場山の壮大な湿原を見ることができて感動しました。登山部員としての最後の大会がすばらしいものになって良かったです。藤田先生の話にもありましたが、登山部で学んだ生きる知恵をこれからも生活に活かしていきたいと思います。

（原　洋揮）

４人パーティーの残りの３人の先輩は昨年の青森ＩＨにも出場していてＩＨはとにかく登山行動のペースが速くきついと聞いていました。そして、それに向け体力トレーニングを積んできました。前大会よりペースも遅かったらしく、練習のおかげもあってか、今大会楽しく登山できました。ただ、体力で差がつかないのでもう少しペースが早くても良かったと思います。来年のＩＨにも出場できるように新しいチームでまた頑張っていきたいです。

（石橋　和也）

Ａ隊３班　鹿児島県　鶴丸高等学校

私たちのチームは、３年１人２年３人で、私はその中の唯一の３年として本大会に出場させていただきました。

開会式が終わり、我々はバスに乗り幕営地をめざしましたが、大会コースの事前下見を行っていなかった私たちはまず苗場プリンスホテルの大きさに圧倒され、そしてその周囲にそびえ立つ山々を見て、明日からこれに登るのか…と不安な気持ちになりました。しかし、そんな不安もその後行われた交流会で他県の選手たちと自分たちの県について話し合ったり、下見の様子を聞いたりすることで解消されました。

行動初日の平標山コースでは、最初の急登で隊がジグザグになって登っており、先が全く見えな

かったため、何度も心が折れそうになりました。終始このような状態ではあったのですが、無事山頂へ辿り着くことができました。生憎雲がかかっていたために眺めはあまり良くなかったのですが、それでも十分に達成感を味わうことができました。

２日目の苗場山コース。最初のタイムレースでは、先頭集団の後方を歩いていながらも、着いてみれば３４番と、他県の体力を実感することとなりました。苗場山の登山中は前日と打って変わって晴れとなり、チーム全員が初めてである標高２０００ｍからの景色を楽しむことができ、また下りでのドラゴンドラでは優雅な空中散歩に一同大はしゃぎでした。

最終日の三国峠コースでは、かつての偉人たちがこの地を歩いたのか、と感慨深く思いながら歩きました。三国峠では、メンバーが「偉人がかつて踏んだかも知れない」石を拾うのに勤しむ姿も印象的でした。

今大会で登った山は全てが近くに集まっているというのに、それぞれの山に特徴があり、大会、という枠の中ではありましたがその中でそれぞれの山の魅力に触れることができたのではないかと思っています。その結果として、このチームの中で今年１番の点数を出すことができました。私は今大会をもって引退となりますが、引退するにふさわしい大会にすることができたのではないかと思っています。後輩たちには、今回の経験を生かし来年の大分 IH で更なる活躍をしてくれることを祈っています。

Ａ隊４班　山形県　東根工業高等学校

この夏は、私にとって最も熱くなれた夏だった。ロンドンオリンピックに負けないくらい、熱い、熱い夏だった。苗場・平標・三国の三つのコースを登り切った達成感は今まで頑張って来たから得られるものだと思う。コース隊長さんから班長の小池さん、Ａ隊４班のみんなの協力があったから登れた。みんなに感謝したい。そして、この大会が終わりではなく、始まりにしていきたい。又、県大会ではわからない他地域の学校の交流も楽しく一生の思い出になった。

（笹原　竜次）

今回、新潟で開催されたインターハイを通じて様々なことを体験、勉強できたと思う。初めてインターハイに参加することができたが、想像していたより楽しく過ごすことができた。基本的には他校との競争という事になるが、様々な地域の学校と交流で自分達の他にもこんなにも登山する人がいるということに驚いた。自然との戦いというイメージがあった登山にも自然との交流で様々な経験をし、成長できるのだと知った。どうもありがとう。

（後藤　吉健）

今回のインターハイは自分にとって様々な事を学べたと思えた。全国から集まった各県の精鋭を相手に、自分達はひけをとらずに平標山・苗場山・三国峠コースを登り切れた事に誇りを感じている。自分はどちらかといえば人と交流するというのは苦手なのでしたが、このインターハイを通じて他県の人達と交流した事でいつの間にか自分から積極的に話しかけ、交流することができました。そして、最後にこのインターハイは自分が自分に誇れる物であり、改めて仲間の大切さを将来に活かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

（推名　克弥）

今回のインターハイを通じていままでにない楽しさを感じた。全国から集まった選手たちと競い合ったり、話したりインターハイは辛いだけだと思っていたがそうではなかった。この経験、もし野球部に残っていたらできなかったと思う。一年半山岳部でこのメンバーで、先生、後輩と活動できたことを誇りに思う。コース隊長が言っていた、「また新潟に遊びに来てほしい」。すぐにとはいえないが、もし行ける機会があればいきたいと思う。そして恩返ししたいな。本当にありがとうございました。

（奥山　伸哉）

Ａ隊４班　新潟県　新潟県央工業高等学校

「君たちが３年生になったら新潟でインターハイあるからね。」

僕たちが入部してすぐ言われた言葉で、強く印象に残っていた。

新潟インターハイに開催県として出場しなければならないと後から気付いた。

何も分からないのにインターハイへ出場する先輩方の準備を手伝った。いつもの山行とは違う計画書、手探りで始めた概念図、断面図。僕たちは登山大会とは何だろうと思っていた。

そんな中、登山大会とは何か、と先生に教えてもらった。先生は「他の競技とは違って、それぞれの山で訓練して技術や知識、体力を審査するもので言うなれば大会山域での実力テスト　決して他校の選手と競うものではない」ということを聞かされた。

あれから月日が経って、新潟インターハイの前大会である青森大会に臨むことになった。
その時のメンバーは全員インターハイ初出場で右も左も分からない状態だった。結果は 17 位と悔いの残る結果となった。体力、歩行、読図、課題テストとほぼ全てにおいて不十分だということに気付かされた。

青森大会での苦い経験を胸に、新潟インターハイに向けての練習を重ねた。地の利を生かして大会山域を中心として体力、歩行、読図の強化に努めた。校内練習の時も今までやってきたこととは違うトレーニングをした。また、生活習慣も改善して健康管理や早起き、たくさん食べることで運動と生活の両面で基礎をつくり万全な体勢で大会に臨めるようにした。

初日の平標山で見事なお花畑を見ることができた。あいにく山頂での展望は無かったが、山頂から平標山の家へ下る時、登山者とすれ違う度にあのお花畑がいかに人気で美しいかを再度実感した。下山後の講話の中で、講師の藤田善思さんは、苗場初登山時は小学生の頃で今みたいに道は整備されていなかったため三俣地区から登って行った、と話し現在の登山と比べられないほど過酷だったということを知った。2 日目の苗場山は平標山のお花畑とは違っていたり、頂上の霧に包まれた池塘がきれいに見られたりと楽しめた。最終日、平標山の家の稜線上から見る平標山と仙ノ倉山の雄大さには最終日にふさわしい絶景を見られたと思う。

天候や景色に恵まれたこと、先生や OB の支援により素晴らしい大会に参加できたことを感謝します。支えて下さった方々、ありがとうございました。

Ａ隊４班　滋賀県　水口東高等学校

本日をもって、僕の高校時代の登山が終わった。とてもたくさんの人に支えられ、素晴らしい岳友とともに登れたことに感謝します。この二年半で学んだことを活かし、立派な岳人となることを誓います。この大会を支えてくださった全ての方に深く深く感謝します。本当にありがとうございました。そして山よ、ありがとう。いつか皆さんと山で会えますように。

（船田　圭輔）

私は前回大会も参加しましたが、今回の大会は前回よりも十分に山を楽しめるものになっていたと思います。自然豊かな苗場山系は大切な青春の１ページに刻まれました。また、三年生の私にとって今回大会で最後となります。自分の三年間の集大成を発揮するのにふさわしいものになったと思います。そして、前回に引き続き、コース隊長・副隊長・４班の班長・副班長を皆で胴上げしたのは一生の思い出です。ただ今回は前回に比べて胴上げする人が少なかったのは少しさびしかったです。最後に、前回大会に引き続き同じ班となった下松工業高校、新潟県央工業高校、班は違いましたが札幌北高校、今回も懇意にしてくださりありがとうございました。そしてもちろん参加された前チームのみなさん、大会役員のみなさん special　Thanks です。

（土田　祥生）

今大会では、山頂からの壮大な稜線や広範囲に渡るお花畑が見どころと聞いていたので、楽しみにしていたのですが、平標山頂、苗場山山頂に到着したとき、あまりにも規模が予想外だったのでとても驚きました。さらに平標山山頂から見えた谷川連峰は地平線まで稜線が続いているようで、とても感動しました。しかも右を見たらまるで崖のような谷に少し恐怖を思ってしまいました。しかし、そんなときは隊行動で移動していたので、自分が好きな視点で見ることができなかったのでとても残念でした。

（星野　司）

今大会では、やはり苗場山の頂上がとても雄大

で感動しました。山の下からは想像もできないような湿地が広がっていて、わかっていても驚きました。ですが雲尾坂の下りでは、危険ですべりやすい下り坂のすぐ下に審査員がいて、こんなところで急がせるようなことをすると結構危ないと思いました。今回は隊行動が多かったのですが必要以上に止まることが多かったように思います。チーム行動がありましたが、チームが多すぎでつまり気味だったのが気になりました。

（平井　尚輝）

Ａ隊４班　大分県　竹田高等学校

今大会で使用された、平標山コース、苗場山コース、三国峠コースは下見に入ったときから、それぞれが今まで登ってきた山との違いを持ち合わせていて、頂上に湿原が広がっていたり、世界最大級のゴンドラ、ドラゴンドラであったりと、楽しみを含んだコースで登ったことが良い経験になりました。その中でも苗場山山頂に点在していた池塘は圧巻でした。ワタスゲやホタルイが生えていてとても美しかったです。大会の時はガスっていたけれどそれもまた幻想的で下見の時とは違う美しさがありました。炊事場を食器洗いに使うことが出来ないというのは、運営的にも環境的にも大変よろしいことだと思います。来年度開催県としては見習いたいと思う点です。チーム行動も昨年の百沢コース、嶽コースと比べ良心的な時間設定でした。こちらの安全を考えてくれているなと、大変強く感じました。ただ、行動２日目の苗場山コースのとき、設営審査が役員の方全員に伝わってなかった事、またそれによって、その日の審査が終わったのかまだなのかがわかりづらかったです。それと行動１日目の設営審査の時間が大変長く、就寝が時間ぎりぎりでした。来年以降改善していただきたいです。良い点や反省点など色々な事があった今回のインターハイでしたが、４日間を通して考えると大変素晴らしい大会でした。今回の大会で学んだ事は我々の宝です。今大会に参加できてとても良かったです。来年の大分インターハイも素晴らしいものになることを期待しています。

（メンバー四人）

新潟の皆様、素敵な大会をありがとうございました。監督と来年の視察を兼ねて参加させて頂きました。監督隊を担当してくれた森田さん、お世話になりました。最後尾で励まして頂いた斉藤さん、ご迷惑をおかけしました。結局のところ、大会の成否は関わる人々によることを再確認しました。選手・監督・運営側・審判の全ての人々が、「いいインターハイにする」という心意気がこの競技を魅力的なものにします。監督が選手の食糧を持つなど、興ざめする光景もありました。こうした行為を反面教師として、より魅力的な山岳部を築きあげていきます。では皆様、大分インターハイでお会いしましょう。

（監督：高橋　憲一）

Ａ隊５班　福島県　白河高等学校

私は３年生と言うこともあり最後のインターハイでした。今回最も痛感したことは「準備の大変さ」と「経験の大切さ」でした。まず、私たちは体力トレーニングに重点を置いていましたが、大会への膨大な準備の数々に追われ、徐々に体力トレーニングはできなくなってしまいました。また大会を過ごしていくうちに思わぬ所で原点を喰らってしまったので、その部分で経験面での重要さを実感しました。

大会中の感想としては、４日間天候に大変恵まれて、清々しい山行やテント泊ができたと思います。体力面も前年度は審査が厳しかったと聞いていましたが今年は比較的緩やかなペースで非常に登りやすかったです。ただ、赤い帽子を被った審査員を見るとどうしても緊張してしまい、普段の実力を発揮することがなかなか難しかったです。

今大会、結果は不本意でしたし私としても足を引っ張ってしまった部分もありましたが、今後の人生の中で宝物になるであろう経験をさせて頂いたと思います。その陰には、大会実行委員の皆様をはじめ、大会を共にしたメンバー、３年間共にした同級生の部員たち、大会の準備に尽力して下さった顧問の先生方、そして後輩たちの存在が不可欠でしたので、それらの全ての人々の感謝の気持ちを忘れずこれからの生活を送っていきたいと思います。

本当にありがとうございました。（井戸沼昇吾）

Ａ隊５班　山梨県　韮崎工業高等学校

私たち、韮崎工業高等学校のメンバーは 4 人全員が夏のインターハイでは初めての出場でした。

昨年、山梨県総体では準優勝に終わり、インターハイには出場することはできませんでした。とても悔しい思いをし、「来年こそは」という気持ちで準備をしてきました。

そして今年 5 月、私たちは悲願の優勝を手にすることができました。ここから本格的にインターハイの準備が始まりました。

インターハイは県総体に比べるとはるかに審査が厳しいと聞いていました。また、審査項目も増え、学科においては一人一分野を担当しました。審査基準も複雑なところもあり準備にはとても長い時間を費やしました。

そして大会当日。少し不安と緊張感がありましたが、開会式が始まると気が引き締まりました。1 日目は順調に終わり､2 日目からはいよいよ登山行動が始まりました。まずは平標コース。全コースを何度か下見しました。読図ポイントを落とさないように、常に集中しなくてはなりません。稜線までは急登が続き、体力が試されました。常に現在位置を確認しながら進んでいき、山行初日は無事に終えることができました。

山行 2 日目は特に楽しみにしていた最も長い苗場山コースです。サブ行動のため体力的には問題ありませんでした。田代原分岐からの下りはとても急で、声を掛け合いながら注意して下りました。読図は問題ありませんでした。

最終日は三国峠コース。最後ということでもう一度気を引き締めました。晴れていたため、最初の木段の急登は暑く、ひたすら我慢でした。稜線に出ると景色が良く楽しめました。

大会期間中は炊事、幕営共に問題なくスムーズにできました。練習の成果を発揮できたと思います。

私たちは最終的に 11 位で今大会を終えました。メンバーの中には満足できた人、できなかった人がいました。主将としての願いは、来年もう一度インハイに挑戦して欲しいということです。

最後に、インターハイで感じたことは多くのサポートがあったということです。行動隊の先生方をはじめ、自衛隊、設営隊など書ききれないほど多くのサポートがありました。そのお陰で怪我や大きなトラブルもなく終えれたと思います。同世代の方々からのサポートもとても心強かったです。大会 5 日間お世話になった多くの人に感謝したと思います。ありがとうございました。

（大柴　結人）

Ａ隊５班　福井県　福井県立科学技術高等学校

今回のインターハイは僕にとっては２度目であり、最後の大会となりました。１日目の開会式の後に救急のテストがあり、最後の知識テストだから満点を取ろうと思い勉強し、満点を取れたので、とても嬉しかったです。２日目の平標山ではメインザックが重く肩が痛くなりました。重い物に慣れる練習が必要だと思いました。３日目の苗場山では昨年度の岩木山のように体力差が出せたらよかったのにと思いました。今までの練習の成果を出すことができた大会でした。

（平井　慎悟）

私には初めてのインターハイでした。今までこの大会に向けて一生懸命練習してきました。準備も本当に大変でした。しかし、大会の本番ではミスもあったものの、仲間と協力して最後まで頑張ることができました。また、他県のチームと交流することでそれぞれのチームの良いところを学ぶことが出来ました。大会を終えて登山の良さを感じることができ、山岳部に入部して良かったなと思える大会でした。

（早瀬　史登）

入部当時、体力がなかった私ですが、高校生活最後で全国大会に出場できたのは最高の思い出です。天気図の審査ではチームに貢献することができず、後悔をしています。平標山、苗場山どちらも素晴らしい山でしたが、ガスに覆われてしまったことが少し残念です。今回の大会で、多くのことを学ぶことができました。来年からは社会人になるので、大会で学んだ事を活かして、頑張っていきたいと思います。また、新潟に来たいと思っています。

（鉾田　翔太）

私は山岳部に入ったばかりの頃、体力も無く山

に関する勉強も殆ど出来なかったので、こうやって全国大会に出場できたのはすごく嬉しかったです。大会初日の自然観察のテストではなんとか満点をとることができました。２日目、３日目、４日目の記録では、平標山ではくじけそうになりながら、苗場山コースでは余裕をもって、三国峠コースではしっかり書けているか不安になりながらも、なんとか全コースで満点を取ることができました。私はこの大会で、仲間とのチームワークの大切さに改めて気付けたので、これからもそれを大切にしていきたいです。

（牧野　真太郎）

Ａ隊５班　静岡県　富士宮西高等学校

今大会の開会式では、ペーパーの際にものすごく緊張したことを覚えています。そのために、正直言うとペーパー前の太鼓など話は頭に入りませんでした。自分は、自然観察のテストで点数が高く、プレッシャーが大きかったです。それに、年々難しくなっていると聞いているので、範囲をすべてしっかりと暗記しないといけないと思いました。しかし、やってみると今回は見た感じ、去年よりは難しくなく基礎だったので問題なく解けることができました。ある意味こういったものすごい緊張は、体に悪いですが、良い経験になったと思います。それとテストでは間違えてチームの足を引っ張ることはなかったのでよかったです。

（富永　真平）

大会二日目の平標山コースは、登山行動の第一日目でした。自分は初めての全国大会という舞台に緊張していましたが、今までやってきたことがしっかりとできたので良かったです。平標山コースは松手山までの行程は上り坂であるため体力的に少し心配がありましたが、隊行動であったので余裕を持って登ることができました。平標山までの稜線を歩いていた時はあいにくの天候であったために景色を楽しむことができず残念でしたが、歩きやすくて良い所だなと思いました。平標山コースでは大きなミスというものはなかったと思うので良い形で終われたと思います。

（新林　卓也）

大会三日目の苗場山コースは、チーム行動があるということで緊張していました。しかし、６０分とは思っていたよりも長くとても楽に歩くことができました。これでは体力に差がつかないと感じました。苗場山は花が多く幸せな気分を味わうことができました。頂上を降りる時、この山に来るのも最後なんだと思うと寂しい気持ちが胸にあふれていました。最後に乗ったドラゴンドラは眺めが素晴らしく、ワクワクしたのをよく覚えています。とても良い思い出ができました。

（原田　祐希）

大会最終日は、三国峠コースでした。大会最終日ということで安心してしまいたいとことですが、最後まで気を抜かないようにしました。この日の審査は今までのコースとは違い、審査が途中までだったので個人的に山を楽しむことができました。はじめは石がゴツゴツした道を、登山口から三国峠まで登りました。隊行動だったので、少し余裕をもって登ることができました。三国峠からは急な階段の道を登りました。昔の人の街道を通る同じ景色を味わえました。今大会で、自分の仕事をこなせたので良かったです。この大きい舞台で良い経験ができたと思います。

（沖　健太）

Ａ隊５班　鳥取県　境港総合技術高等学校

私にとって３年間の山岳部活動の締めとなる登山であった。小さなミスが多かったので悔しさが残った。去年よりは良かったがもっと少なくできたと思った。昨年と比較し、完歩出来たこと、読図が出来たことは評価したい。平標山、苗場山の景色は良くなく残念だが、涼しく楽しい登山であった。最後にとてもいい登山をさせてもらった役員の皆様と山にありがとう。

（景山）

踏査で登った時は快晴で気持ちのいい登山が出来たが、本番こんな快晴だったらどうしようと思った。私は１年生で登山は小５の時に一度登っただけだし、山岳部に入ってまだ数カ月しかたたず、圧倒的な経験不足でした。でも、大会になったとたんに、空が曇りだして踏査で登った時よりも涼しく楽に登山が出来ました。

（影山）

昨年のインターハイは暑かった。その暑さにより仲間がダウンした。そんなことを思い出しつつ今大会が始まった。天候は薄曇りで暑くなく、踏査時の快晴とは打って変わって歩きやすい。この大会では遅れることなく完歩出来た。

（福井）

昨年のインターハイの失敗を反省し、大会中は終わるまで気持ちを落とさず継続するよう努めた。前回はチーム行動でバテてしまったが今回は天候も曇りで暑くなく、むしろ気持ちのいい山行だった。今年で僕は引退だがこの大会を無事にみんなで完歩出来たので悔いはない。この３年間の苦しいことも楽しいことも良い経験になった。

（松下）

鳥取県は相変わらずの多雨で暑さ対策が出来ず、今年も最初の敵は暑さだなと覚悟をしていました。しかし、比較的に涼しく、快適に登山が出来たことがとても印象に残りました。行動途中に本校監督が負傷し、大変ご迷惑をお掛けしました。行動役員や運営の方々に心から敬意を表します。また来年に向け準備を始めたいと思います。

（岩田）

Ａ隊５班　佐賀県　佐賀工業高等学校

私達は 25 年ぶりに県総体で優勝して今大会に出場しました。新潟県に来るのは修学旅行以来 2 回目で期待に満ち溢れていました。初めての全国大会は雰囲気が県大会とは違い、開会式の時点で緊張が私を襲いました。無事ペーパーテストを終えて登山競技に臨みましたが。一度下見に入っていましたが、選手の多さと過酷さに圧倒されました。2 日目の苗場山コースのドラゴンドラは疲れた体に癒しを与えてくれました。景色の美しさも過酷な登山も、すべていい思い出になりました。

（松尾　佳介）

私は、今大会に出る事ができて大変うれしく思っています。県代表としてこの場に立てた事に大きな意義があり、とても誇りに思います。そして、このすばらしい新潟の山々を舞台に仲間と登れたことはこれからの人生の糧になると思います。すばらしい景色、山に咲く花々は今も鮮明に残っています。新潟には冬に来たことがあるのですが、それとはまた一味違った新潟を見ることができ、もう一度、新潟に足を運んでみたいと思いました。

ここまで来るのにもさまざまな人の協力や助けがありました。新潟の方々は勿論、地元の人にも助けられました。今後はその人達に何らかの形で感謝の気持ちを表したいです。

（高柳　貴史）

私は読図を担当していました。登山行動中は地形確認に集中していて景色を眺めることは少なかったのですが、苗場山頂の湿原はとても美しいものでした。それに自衛隊の方々や設営隊などの役員の方々のサポートのおかげで、登山を楽しく行うことができました。本当に感謝しています。

（長尾　賢）

私は、今回初めて全国大会に出場し、また県大会も 25 年ぶりに優勝するというとても恵まれた時に山岳部に入部でき本当に幸せだと思いました。佐賀工業山岳部は部員も 40 人近くおり、とても活気が出てきました。しかし、こういった経験が出来るのは貴重なことだと思うので、後輩に伝えていこうと思います。

（松永　竜次）

Ａ隊６班　東京都　明治大学付属中野高等学校

初めてのインターハイは、全てのチームが体力、技術共に非常に長けていて、レベルの高さに驚きを隠せませんでした。また、今大会で沢山の学校と親交を深めることが出来ました。色々な都道府県の多種多様な文化を聞くのはとても興味深く、また面白いものでした。辛く厳しかったけど、とても楽しい大会で、「またインターハイに出たい」という気持ちが強くなりました。これから努力して、一回り成長して来年もインターハイに出たいです。

（上村　悠馬）

初出場の今回、一番良い経験になったことは、他県との交流です。登山の大会ではありますが、全国の高校生が一同に集まるというのは、そうい

った異文化交流の場として非常に良いものだと思います。お互いに地元のことを紹介したり、相手の県について気になっていることを質問したりすることで、自分が持っていた印象が変わったり、偏見が無くなり、新しい世界が見えることが多いからです。 また来年インターハイに出場し、そういった輪を広げていきたいです。

（佐山　達郎）

全員がインターハイに初挑戦という不安だらけのチームでした。しかし、開会式や引継式で多くの役員の方々が「楽しんで欲しい」と言っていました。自分はインターハイと言うととても過酷で他の県の人たちと常に争っているイメージだったからその言葉がとても不思議でした。しかし、このインターハイを終わった後にもう一度考えてみると楽しかった記憶ばかりが思い浮かんで来ます。そして今回のインターハイで経験したことを踏まえながら春の東京都大会に挑戦したいと思います。

（松原　宏実）

今年初めてインターハイに出場しました。開催地が湯沢、苗場山周辺ということで前から楽しみにしていました。審査等が入ってくると普段の山行とは違い、緊迫した空気の中で設営、炊事等をこなすことに不安でいっぱいでした。最終的に順位というものがつきましたが、この 4 日間で学んだ技術は今度に活かせるもので、また新潟県の美しい山々に登れたことに誇りを持ってます。4 日間本当にありがとうございました。

（山本　浩輝）

Ａ隊６班　長野県　松本県ヶ丘高等学校

全国制覇―この目標を達成するべく自分なりに考えた。そして青森での悔しさを胸に一年間全力で活動してきた。結果は８位。言い表せないほど悔しかった。しかし、自分たちがここまでやってこれたのは、顧問の先生をはじめ、メンバー以外の部員、保護者の多大な援助があったからだと思う。応援してくださった方々に深く感謝したい。私はこの忘れられない経験を糧に自分の道を進んで行こうと思う。

（塩谷　晃司）

今年は２回目の大会であり、去年の大会は悔しい思いがたくさん残った大会だった。今年は全国で優勝という目標を持って日々の練習や山行を重ねてきた。だが８位という結果で終わりました。入賞もできず非常に悔しかったです。今年全国にいった２年生２人は来年も来年も全国大会の切符を手にいれまた全国大会に挑戦して上位を目指してもらいたいです。最後に応援してくれた方々ありがとうございました。

（平田　雅人）

私ははじめて全国大会に参加した。実際参加してみて、県大会とはまったく違う採点方法、幕営地での過ごし方、全国大会独特の班行動、隊行動にはじめは戸惑った。しかし、先輩方がいなければさらに混乱したと思う。本当に先輩方とこれてよかった。また、幕営隊の皆さんのトイレ、ゴミ捨てなどへの配慮のおかげで、幕営地で 4 日間快適に過ごせました。幕営隊の皆さんありがとうございました。

（坪田　塁）

全国大会というものは、県大会とは全く異なるものであった。初めて臨む全国大会。自分はその場の空気にのみ込まれそうであった。というかもはや、のみこまれた。今回、豊富な高山植物などがきれいに咲き、とても楽しめた。日本各地からくる人々と交流し、他校の部の現状を聞くなど、とてもよい機会になった。自分らの結果は、残念な結果となり、悔しい思いをしたが、自分にとって良い経験ができ、来年につながる大会であった。ありがとうございました。

（平林　健太郎）

全国高校総体登山大会が北信越ブロックで開催されるのは、1994 年の富山県立山での大会以来 18 年ぶりである。ブロック内の開催がこんなに間隔が空くと、運営の経験者がいなくなり大変であるが、その点では新潟高体連登山部の動員力には感服した。男女同じ天場を 3 日間使い続けるなど、運営にも工夫が見られ、監督団には概ね好評であった。 一方行動中での監督団への対応では首をかしげさせられる場面がいくつか見られた。監督団は支援を含めると５０人にもなる。それだけの人数を一団で動かそうという発想が信

じられない。各自の間隔が 2mでも全体では 100mにもなる。運営への協力をと、詰めるようにいわれたが、先頭と最後尾ではせいぜい２分程度の違いであろう。５分以上(数百m)も間隔が空くというのなら、もっと詰めてと言うのが当たり前だが、１分以内(50m以内)程度の間隔については配慮をしてほしいと思った。さもないと集団の中に「立ち止まってばかり」という状態になる。また、選手と同じような行動を強要し、雷清水や平標山の家で水を飲んだ監督に注意するなど、行き過ぎではと感じた。運営上の観点からだと思うが、苗場山の山頂を通らなかったことも残念であった。下見をしたチームは別として、本番で苗場山頂の一等三角点に触れることを楽しみにしていた監督や、山小屋(苗場山自然体験交流センター)でバッチ等を買い求めたいと思っていた監督もいたはずである。加えて、今回は監督団全員での記念撮影がなかったのも心残りであった。

（監督：松田　大）

Ａ隊６班　大阪府　近畿大学附属高等学校

「来た～！新潟！」。

大阪大会を突破し、インターハイへの切符を手にした瞬間、僕達のチームは喜びに包まれ、互いの努力を認め合った。しかし、喜びばかりだったのはその日だけで、「インターハイへ出る」ということの重圧と大変さをすぐに思い知らされることとなった。

今回は、３年生と１年生が半々のチームだったが、３年の僕等でさえ今まで経験したことのない程の緻密で細かい準備、猛暑の中でのトレーニング。「１年生は、ゆったりと山を楽しむ経験もなしにインターハイへ出場することになってしまったけれど、この大会が終わったらやめるなんて言わないかな。」と心配もした。

この大会に向けての準備が完了したところで、「あとはしっかりインターハイを楽しんでこい。」という顧問の先生の言葉を胸に新潟入りをした。越後湯沢に着いてみると、カラッとした空気で、まるで異国に来た感じがした。

会場では、地元の高校生が拍手で迎えてくれ、開会式の受付やサンプリングもしており、僕達がインハイ出場を決める随分前から大会の準備をしてくれていたことを知った。この大会は、県や町をあげての高校生のお祭りであった。いただいた「希綱-kizuna-ブレスレット」には「選手の皆さん、頑張れー！」というメッセージとともに、ブレスレットを作ってくれた方の高校名が手書きされているのを見て、温かい気持ちになった。

山には、たくさんの美しい花が咲き乱れていた。青い風鈴のようなミヤマシャジン、小さいピンクの花が集まったシモツケソウ、繊細な糸のような花びらをもつタカネナデシコ、山吹色の絨毯のように群れて咲いていたニッコウキスゲなど、皆疲れを忘れさせる程綺麗であった。

高校生活最後の大会となった初めての全国大会は、不慣れな隊行動や地方大会との違いによる戸惑いなどはあったが、大自然の中の山行では可憐な草花を見、様々な地方の人たちと交流が出来、大変楽しかったし、充実した夏になった。心配した１年生は大会終了後、「先輩、来年もインターハイへ行きます」と言ってくれた。

Ａ隊６班　広島県　修道高等学校

この会話は雪国の宿「高半」での夜の会話である。

村上：「あぁー疲れたー。みんなお疲れ様！！そういやぁオレ以外の人は初のインターハイだったね。箕田どうだった？」

箕田：「インターハイって何か堅苦しいイメージだったけどそれは審査中だけであって、審査後に他の学校と交流できたのはとても楽しかったし、新鮮だったよ。三村は歩行中一回もこけてなかったけど、どんな気持ちで歩いてた？」

三村：「完全に自分のことを信じて歩いていたよ。でも、審査員に見られている時は緊張してうまく歩けなかったわ。まぁ、審査員がうまく隠れてくれていた時は、普段通りだったけどね。安井はいつも一番後ろを歩いてくれているけど大丈夫だった？」

安井：「うん。大丈夫じゃなかった（笑）ついて行くのに精一杯だったなぁ。とりあえず俺の中で一番印象に残っているのはペーパーかな。やっぱり一番最初だったし。三村はすごくいい点をとるなんてすごいよね。緊張しなかった？」

三村：「直前まで手が冷たくなるほど緊張してた

けど、そのまま引きずらずに切り替えられたのが良かったと思う。村上は二年目で色々なことを考えながら挑んだと思うんだけど、今年はどうだった？」

村上：「まずやっぱり思ったのは今回の大会も前回の大会のようにこの大会がとても多くの人々の助けの上で成り立っているんだとあらためて感じたね。これはみんな設営隊や審査隊や行動隊やボランティアの人々にとても感謝しないといけないよ。登山のインターハイは決して僕ら選手だけではなりたたないということを心に、これからは最後に隊長さんも言っていたように『山に恩返し』をしないといけないね。じゃあ最後に安井に…。」

安井：「あ、俺今から 10 時の天気図があるから箕田が代わりにまとめてくれるよ。」

箕田：「湯沢は涼しいし、山も広大できれいだったね。僕のまた登りたい山リストがひとつ増えたよ。あと、湯沢の人たちのサービスにすごく感動したかな。広島では受けたことのない、親切、温もりを感じたよ。湯沢にまたこの４人で来たいね。」

Ａ隊６班　高知県　土佐高等学校

まずは、今大会に参加された各チームの皆さん、お疲れ様でした。

僕達のチームは、三人がインターハイ初参加で、新鮮な気持ちでこの大会に臨みました。県大会、四国大会と参加してきましたが、インターハイの規模の大きさには驚かされました。各校の色とりどりのテントは並ぶ光景は壮観でしたし、全国の都道府県の代表が一同に会しているのだと思うと、気分が湧き立つのが感じられました。そしてやはり何といっても、平標山・苗場山・三国峠の三つのコースではインターハイでしか出会えないであろう雄大な景色を楽しめました。

二日目の平標山では、満開の花畑に迎えられ、行動初日から胸が高鳴りました。紫やピンクの花々が咲き乱れる眺めは、奇麗の一言に尽きました。

三日目、メインコースの苗場山では、山頂の広大な湿原が印象的でした。急登の雲尾坂を息を切らしながら登り切った後に、湿原の大パノラマが開けた時には感動を覚えました。また、５キロを超える長い長いドランゴンドラでは、時折眼下の谷の深さに息をのみつつも同乗した修道高の皆さんと楽しい一時を過ごしました。

最終日、三国峠コースは、審査が途中までだったこともあって、和やかな雰囲気で隊が進んでいきました。稜線上から見た平標山の迫力ある山容は目に焼きついています。僕達土佐高は下見をすることはできなかったのですが、このメンバーで一度きりの苗場・平標山系を満喫できたと思います。

最後になりましたが、僕達がこのインターハイを楽しめたのは、朝早くから夜遅くまでお世話になった設営隊の皆さん、行動を共にしていただいた運営の皆さん、嫌われ役を引き受けて下さった審査の皆さん、その他の全ての皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。今年の北信越かがやき総体に参加できたことを誇りに思います。

また、応援ポスターを作ってくれた土樽小学校の、角谷葉月さん・多田有沙さん・山野辺龍太さん・半澤きらさん・牛木千尋さん・田代彩侑さん・ひぐちゆなさん・わたなべけいたさん、そして、希綱ブレスレットを製作してくれた六日町高校の大津咲希さん・山本茉央さん、本当にありがとうございました。

Ａ隊６班　宮崎県　宮崎西高等学校

私は今回初めて全国大会に出場した。二年前には私一人だけの山岳部であったことを思うと何とも言葉に表せない気持ちになる。しかし初めての全国大会を経験して私たちの部活はさらに成長できると確信した。審査基準を満たすだけの成長ではなく、規律と信頼関係で結ばれた組織としての成長である。私は今自分が三年生であることがとても悔しく思う。次の大会に出場できないからだ。後輩のめざましい活躍を期待したい。

（章　性源）

僕は IH に出場する前は、IH がどういう雰囲気で行われているか知らず、日本のトップを決める大会なんだから、どこの高校もピリピリしていて淡々と大会が進んでいくのかななどと思って正直山を楽しめるか心配でした。しかし実際の大会は

実際に出てみないとわからないことも多かったのですが、様々なチームと会話することが出来て、うち解け、新潟の山々を楽しめました。この IH で得た経験を今後に反映させていきたいです。

（上田　哲平）

新潟の山は、九州の山と比べて標高が高く、植生も違うためいつも登る山とは違う景色をたくさん見ることができ、楽しく山を登ることができた。また、全国の強豪集まっているため、部活についての話をすることもでき、他県の良いところをたくさん知ることができ、交流を深めることができ、とても充実した日々を送ることができた。今回の経験を活かして、部活動に励み、来年も全国大会に行けるよう努力したい。

（小城　慶久）

今回は全国大会に初めて出場しました。また 2000 メートル以上の山も初めてでした。大会前は学習しかしておらず、体力面での心配がありましたが、何とか登ることが出来ました。また、山頂からの眺めもよかったです。しかし、冬にも行きたいと思いました。

（黒木　利樹）

Ａ隊７班　秋田県　横手高等学校

今回の大会を終えて，まず台風や大雨に襲われることなく山行を終えることができ，ほっとしました。ですが，上位入賞という目標とは裏腹に，結果は２６位という厳しいものでした。これはひとえに自分の至らなさであると痛感しています。前回の大会では特区間が大会コースで設けられたこともあり，上位下位の差が大きかったように思いますが，今回はそれが小さく，細かいところで点を落とした僕たちはまだまだ甘いと思い知らされました。来年の大分大会では，後輩たちが今回の反省を生かし，奮闘してくれると信じています。

（齊藤　貴喜）

まず始めに，インターハイというすばらしい舞台に立たせていただいたことをとても誇りに思います。今大会では，全国から集まった山の仲間と交流したり，パーティの良い所を発見することができ，私にとってとても良い刺激になりました。大会の結果は自分たちが思い描いていたものほど良い結果ではありませんでしたが，私はまだ二年生なので，今大会で悪かったところを修正して，是非来年もインターハイに出場し，好成績を収めたいと思います。最後になりましたが，この大会を支えてくださった多くのスタッフの皆さん，共に山に登った仲間に感謝したいと思います。

（佐藤　瑛彦）

インターハイは自分にとって憧れの舞台であり，そんな大会に出場できたことはとても良い思い出となりました。全国から勝ち上がってきた学校と一緒に山に登れたことはもちろん楽しかったですが，それ以上に同じ山を登る仲間と交流し，友好関係を築けたことが何よりも嬉しかったです。今回，自分は２年生での出場ということで，今後につながるような貴重な経験ができました。来年もまたこの舞台に戻ってきたいと思いますので皆さんと再び会えることを願っています。

（岡部　嘉慰）

入部して間もなく県大会が始まり，インターハイ出場が決まりました。入学したての１年生がいきなり全国の舞台で山を登るなんて，当時の僕は想像ができたはずもなく，嬉しさと戸惑いでいっぱいでした。インターハイでは全国レベルの大会で競技できたことに対する感激と，他の県の人々との交流の楽しさ，美しい山々を登った達成感に溢れ，とても充実した数日間を過ごすことができました。この経験をこれからの大会に生かし，来年も絶対インターハイに出場したいと思います。ありがとうございました。

（今野　一真）

Ａ隊　７班　千葉県　千葉東高等学校

今大会は自分にとって二度目のインターハイでした。CL として、昨年先輩方から学んだ技術や知識を今度は伝える側となり、前回とは違った緊張がありました。今回、自分たちは途中リタイアという残念な結果に終わってしまいましたが全国大会という舞台に再び立てたこと、苗場山をはじめとする新潟の山々を登れたことはとてもうれしかったです。そして後輩には今回の結果をバネ

にして次の大会でリベンジを果たしてもらいたいです。最後ですがメンバーの救護･搬送をしてくれた皆様、本当にありがとうございました。

（今長谷　昴平）

昨年度に続き、今年度もインターハイに出場しました。結果としては途中棄権ということになり、悔しさは当然あります。しかし、後悔はありません。県総体で優勝してから、このインターハイに向け、他の部員に支えてもらいながら 4 人で懸命に準備をしてきました。今、僕の胸には努力をしてきた過程が刻みつけられています。このことで大学に進学しても山をやろうという意志を固めることができました。有難うございました。

（山下　大貴）

３年生になって、最初で最後のインターハイに参加しました。リタイアという形で幕を閉じ、悔しい気持ちがないわけではないですが、来年の後輩たちに期待したいと思います。また全国の方々と交流することができて本当にいい思い出になりました。大会に向けて、大会役員の皆さん、計画書作成や精神的に支えてくれた部員 50 人と偉大なる顧問３人、そして応援してくれた多くの方々に感謝です。ありがとうございました。

（小原　岳輝）

今回のインターハイは、自分にとって初めての経験でした。先輩の足を引っ張らず、多くのことを吸収しよう努力していましたが、大会３日目、体調不良によって体離脱となり、そのままリタイアになってしまいました。先輩に申し訳ない気持ちと、自分への不甲斐無い気持ちで一杯です。必ず来年も、再びインターハイに出場し、最後まで競技を続けたいと強く決意しました。また多くの人に迷惑をかけ、助けられました。本当に感謝しています。

（川田　航士朗）

結果として、今年は残念な結果になってしまいました。しかしながら、生徒は学校に残っていた部員、選手を含めて、全力で取り組んだことと思います。

また、今年の大会は、苗場山の登山道の改修や田代への下山道の笹の刈り取り、ステップ作りなど、地元の方々や大会関係者の大会への「愛」を感じました。直江兼続の心が今でも生きていると感じました。特に、決して軽くはない選手を背負って下山していただいた陸上自衛隊の方々に感謝をいたします。

（監督：原　邦夫）

Ａ隊７班　石川県　金沢泉丘高等学校

今回、第 56 回全国高等学校登山大会というこの機会において、私達は夏休み中の一週間という時間を代償にしても余りある価値ある体験ができた。登山行動を終えた大会四日目の夜、私はそう思っている。

まず第一に初めて登山のインターハイに出場して私が抱いた感想は「県大会よりも楽しかった」ということである。その原因としては、まず今回の大会中一度も雨が降らなかったという理由だろう。我らが石川県は総体の行われる６月には雨が多い。今大会では偶然か、とにかく天候に恵まれた。それだけでまず喜ばれるべきことである。次の原因として、丁寧に調整された大会の実施状況のおかげだろう。幕営地等からの移動が利便性が高かったし、サンプリングが特に素晴らしかった。こんなに整った条件で登山を行うことができたことは、驚嘆とともに歓喜の念があふれ出るばかりだった。最後の理由は、やはり肝心要の登った山々だ。苗場山の高層湿原、平標山コースの花々は下見を含めて２度目でも楽しめたし、三国峠コースの尾根伝いの美しい展望はまだ心に残っている。勿論今回のインターハイが初めてで大きなことは言えないのだが、こんなに魅力的な山々に登ることができるというのはインターハイと言えども滅多にあることではないのではないだろうか。正直に言うと来る前は「強そうな全国区の選手達と厳しく辛い登山行動」というイメージを勝手ながら持っていた私としては、このインターハイを「楽しかった」という感想で締めくくる事が出来るというのは、何にも増して嬉しいことである。

そして最後に、これは開会式の時点から思っていたことなのだが、常に思ったことは「とても多くの人の手がかかっている」ということである。コースを一緒に歩いてくれた先生方、審査員の方々、そして主に幕営地などでサンプリングを渡

すと共に温かい言葉をかけてくれ、登山行動の最後に拍手で迎えてくれた設営補佐の皆さん。少し辛い時もとても励みになった。この感想文を彼ら、彼女らへの感謝で締めくくろうと思う。

Ａ隊７班　愛媛県　松山南高等学校

今回のインターハイは下見を含め、１２日間の日程でした。先輩の助けもなく、インターハイ１年目として臨んだ１２日間はとても長く感じ、精神的に疲れる場面もありました。これは自分たちが長い日程に慣れていない練習不足のためだと思いました。後輩たちが同じ後悔をしないよう今後に引き継いでいきたいです。愛媛の山は高低差があり、高い木が生えており、景色を楽しむことはできません。また山頂に辿り着いても山頂だと気づかない山もあります。それに対して新潟の山は展望がよく、これから歩く道がはっきりと見えるので登っていて楽しかったです。中でも苗場山は今まで登った山で一番展望があり、登り切ってとても達成感がありました。高校生最後の山が新潟で良かったです。

今回の大会ではテストや行動記録で思うような結果が出ず苦しい思いをしました。これを後輩に伝えていき、次回からの大会に役立てていきたいです。今回インターハイの雰囲気を味わい、普段にはない緊張感や他校からの刺激など、自分を成長させてくれる良い経験が出来ました。私は天気図を担当していたのですが、思うような結果がでず相当に落ち込みました。３年生ですが、模範解答を参考にして、より上手く作成できるようにと努力してきました。

私は体力がないのですが、今回の大会はあまり疲れませんでした。緩やかな道をゆっくり歩くというような行動だったので、個人的には楽に感じ、他３人にも迷惑をかけなかったと思います。また交流会などを通じて他校とのふれあいができたように感じました。自分たちは行動力がなく、なかなか交流する機会を積極的に持てませんでした。大会を終えて振り返れば損をした気分です。

最後に大会を終えて自分たちが感じたのは大会が終わったという達成感です。しかし勝とうと思うなら、最後まで諦めず集中力を途切れないようにしなければいけません。今回は悔しい思いが多いので後輩たちに頑張ってもらい、大会が終わったという達成感だけでなく良い結果をとって嬉しいという、勝って味わう達成感も味わってもらいたいです。

Ａ隊７班　長崎県　長崎北陽台高等学校

今回のインターハイは無理のない日程で、新潟県の山を楽しむことができました。天気も景色を見る上では、悪い天気でしたが、熱中症を心配していた自分にとっては過ごしやすかったです。さて、今回の大会で気になる事が１つあります。幕営地の様子です。審査終了の指示が出たとたん、テントエリアから出て食事をしたり、他校のテントエリアを横切ったりする様子がありました。これではテントエリアの意味がないと思います。

今回のインターハイを終えて、やりがいのある良い大会だったと思いました。苗場山での眺めは見られませんでしたが、それでも大会山域の様々な美しい景色を見ることができたと思います。知識審査などの様々な審査も受けやすかったとは思います。しかし、設営の時のペグ打ちは地面が固くやりづらかったです。今回の大会は十分力を発揮できたと思うので、次回も出られるよう努力して、次回でも全力で取り組みたいです。

私自身にとっては初めてのインターハイであり、また二年生という立場から、どうしても先輩方の足を引っ張ってはいけない。その思いで一杯でした。全体を通し、特に知識審査で、自分の甘さを思い知らされる結果となりました。しかしながら、読図と記録に関しては、審査の意図が理解できないような出題のされ方だったと思います。これではほとんどの高校に差がつかなかったのではないでしょうか。ともかく、とても良い経験でありました。

私にとって最初で最後のインターハイが終わりました。大会を支えてくださった皆様に感謝の念で胸がいっぱいです。しかし、それでも審査員の方々に申し上げたいことがいくつかあります。ひとつは幕営での審査についてです。幕営の審査は苗場プリンスホテルの特設会場でしましたが、幕営地での地面固さには驚かされるばかりでした。他チームを拝見した所、ペグが折れるのは日

常茶飯事だったようです。次からは幕営審査の会場はもっと土のやわらかい場所でするのが妥当ではないでしょうか。二つ目は、なぜ天気図審査は審査をした当日の放送を流さなかったのでしょう。不思議でたまりません。

Ａ隊８班　北海道　札幌北高校

全国大会が終わり残っていたのは確かな満足感でした。これまでの努力の成果を出し切れたと思います。悔やまれるミスなどもありましたがそれ以上に得るものがありました。それが次につながっていけば良いと思います。

今年は３年である僕以外は大会初経験の２年と１年のみでしたが、初の大会で本当に頑張ってくれました。後輩たちがいなければ僕はここまで来られませんでした。ついてきてくれた後輩たちにはとても感謝しています。

僕たちはいろいろな人に支えられてこの舞台に立つことができました。両親やOBの先輩、応援してくださった先生方、そして大会役員の皆様、大変ありがとうございました。そして誰よりも顧問の菅原先生には感謝してもし尽くせません。本当にありがとうございました。

いろいろなことがありましたが、この部活に入り、今まで続けてきてよかったと胸を張って言えます。登山によってたくさん成長することができたと思います。何より楽しかったです。僕は引退となりますが後輩たちには今後も楽しみながら頑張ってもらいたいです。

今年は僕にとって「躍動」の１年となりました！！

（山本　巧）

今年初めて全国大会に出場し、僕は全国大会の楽しさと難しさの２つの面を感じました。

設営審査、調理審査では今までの練習の成果を発揮することができましたが、筆記試験では何度も確認したはずの部分でミスをしてしまい、自分の実力不足を感じました。　登山行動１日目の平標山では、残念ながら晴れとはなりませんでしたが、今までの練習のように、４人まとまって登り、無事に下山することができました。２日目の苗場山では、山頂からの展望を臨むことはできませんでしたが、登山中に何度か展望が広がり、素晴らしい景色を見ることができました。楽しみにしていたドラゴンドラにも乗ることができ、大会ではありますが、とても楽しい登山を行うことができました。３日目は天候に恵まれ、気温は１日目、２日目より高くなりましたが、素晴らしい展望が広がり、この日も楽しく登山を行うことができました。筆記試験に限らず、予想外での部分のミスもありましたが、移動中や、下見登山などもとても楽しく、とても素晴らしい経験となりました。

これからも日々練習を重ね、是非来年も全国大会に出場し、今年の経験を活かして頑張りたいと思います。

（石谷　直貴）

開会式の日，初めて会った全国の代表選手はいかにも普通の高校生のようで，４人中３人がメガネという僕たちと同じ構成のパーティーもいた。この人たちがみな地区大会を戦っていて，これから同じ山に登り，同じところでテントを張って寝泊まりするというのが不思議だった。そして，４月には想像もできなかったインターハイというものに自分が参加しているという実感が持てずにいた。

落ち着きを取り戻せないまま始まった大会，重いメインザックを背負っての平標山の急登や苗場山のチーム行動は遅れずについていけるか不安だったが，遅れることもなく３日間歩くことができ，また初めての地を楽しむことができた。さらに他県の選手との交流や，三国峠下山後の胴上げはこの大会を僕にとっていっそう思い出深いものにした。１年生でこれほど濃い５日間を過ごすことができた僕は本当に幸せだと思う。

だが，２１位という結果の通り課題もたくさんあった。気象知識テストでは不注意なミスで点を落とし，また点数には表れなかったものの読図テストでは地形の特徴をあまり把握できず先輩頼りになってしまった。あと０．１点取っていれば順位も上がっていただけに，何か１つでもミスがなければ…と思い非常に悔しい。これからの１年間で課題を減らし，当たり前のことを当たり前にできるようにして，来年の大分での全国大会で雪辱を果たしたいと思う。

最後に，登山についてだけでなく多くのことを一から指導してくださった顧問の菅原先生，ミスをしてもカバーしてくれたチームの先輩や同級生，さらにこの大会に関わった皆様，そして「北高ワンゲル」を支えてくださった皆様に感謝したいと思います。

（神谷　俊太郎）

私は今回のインターハイの良かった点は大きなもので１つ、反省点は大きく２つあります。

先に良かった点からいきますと、今回のインターハイでは誰かに怪我をさせることや自分が怪我をすることも無く真面目に、そして楽しく大会に参加することが出来た点です。この点に関しはこれからの登山でも同じ感想を持てるように安全には注意していきたいです。

次に反省点ですが、まず１つ目は充分な体力をつけていなかった点です。私は以前からチームの先輩方や１年生に比べて体力が不足していることは明らかでした。しかし、私はそのことを気にしてはいましたが自主的にそれほどしっかりとした体力つくりはしていませんでした。ですからいざ山に登り始めると明らかに私だけがチーム内でもばててしまい、周りの地形の確認などが疎かになってしまうことがありました。

２つ目は勉強不足だった点です。私は今回救急のテストを担当させてもらい、ある程度しっかり勉強をした上でテストに臨んだつもりでした。しかし、私の勉強は詰めが甘く結果は散々でした。 これら２つの失敗の原因はやっぱり努力を惜しんで必要な力をつけていなかったこと。そして恐らくどこかでインターハイのレベルを侮っていたり先輩方に頼りすぎていたりしていたことが原因だったと思います。ですから、来年はチームの力に成れる様に充分に努力し、実力をつけた上で大会に臨もうと思います。

（茂田　空）

ちょっとしたご縁で顧問になり、登山を始めて８年目になりました。知識も技術も何もなかった私が、後半の４年間に連続して全国大会へ出場することができたのは、先輩顧問の先生方のアドバイスと生徒たちの努力があってのことです。改めて先生方には深く感謝し、生徒たちを心から称えたいと思います。

全国大会後のミーティングでは、課題を１つずつ明らかにして次の年に向けてレベルアップを図ってきました。日常のトレーニングメニューだけでなく、ウォームアップにダウン、ストレッチのメニューも順次更新してきました。北海道では順位がつく登山の大会はこのインターハイしかなく、この大会が終わると来年５月の札幌支部大会（その後６月に北海道大会）まで長いオフ期となります。ですからこの９～１２ヶ月間に、いかにモチベーションを維持しながらトレーニングと練習を積むかが課題克服への鍵となるのです。

今年のメンバーのうち大会経験者はＣＬの３年生１名のみでしたから、途中入部の２年生１名と１年生２名にとっては本当に大変なシーズンだったと思います。しかしＣＬ山本君はパーティーをよくまとめあげていましたし、メンバー達もＣＬに従い、時には辛くても４人で楽しく登山ができる、素晴らしいパーティーでした。

登山競技とは、これほどまでにも人を成長させ、人との絆を強くするものなのだということを改めて実感させられました。今回の大会でお世話になった多くの皆様方に感謝しつつ、本校の生徒たちが来年の大会に向けてさらに「躍動」するのを見守りたいと思います。

（監督：菅原健夫）

Ａ隊８班　群馬県　新島学園高等学校

今回、インターハイに初めて出場させていただき、リーダーとしてメンバー全員をまとめることの難しさがわかりました。また、個人的には天気図を担当し、大きく点数を落としてしまい、メンバーに迷惑をかけ申し訳なく思いました。来年は、私が感じた無力感を後輩が味わうことのないように日々練習に励んでもらいたいと思います。当初の目標をはるかに下回る結果となってしまいましたが、直前に行った平標山から谷川岳を経て白毛門に至る２泊３日の縦走合宿と併せて、今大会は私にとってほろ苦くも充実した青春の１ページとなりました。また、ドラゴンドラの長さとスリル、清津川の清流も最高でした。こんなに

素敵な下山方法を企画していただき、ありがとうございました。最後に、今回お世話になった８班の隊長、副隊長、補助員の皆さん、大会に関わってくださったすべての皆さん、そして、家族、顧問の先生方、メンバー、部員のみんなに感謝です。

（櫻井　拓也）

今回の大会は、私の山岳部生活の集大成となるはずでした。あわよくば優勝をとねらっていましたが、現実はそんなに甘くなく、悪い結果となりました。しかし、一晩よく考えてみたら、この結果が妥当かなと思うようになりました。塾を理由に部活動を休んだり、夏休みにしか来ないで、来ても何もしないメンバーもいました。表面的には仲良くしていても結構ギスギスしていました。こんなチームが上位入賞したら、それはそれで恐ろしいし、大会のレベルを疑ってしまいます。悔いは残りますが、楽しい登山大会であり山岳部での６年間でした。

（小池　碧）

４日間の大会は、長かった準備期間に比べてあっという間に過ぎていきました。私は、今回のコースで特に雲尾坂を登り切った後の苗場山山頂一帯に広がる広大な湿原の美しさに驚かされ、この大自然の尊さを感じました。何より、この大会を通して、自分たちと同じように山を愛する全国の仲間と出会えたことも、とても価値あることだと思いました。そして、自分を支えてくれた仲間たち、先生方、家族、大会に関わってくださった全ての人たちに心から感謝しています。ありがとうございました。

（小宮山　俊）

最初で最後のインターハイは、よいとは言えない結果に終わった。競技初日のペーパーテストからして県予選とは全く違う規模と緊張感であり、最初にインターハイという舞台の凄さを感じた。その緊張感に負けてテストを数問失敗してしまい、そこで失った 0.3 点が今回の大会における最大の後悔かもしれない。私は、今回の大会でやれるだけのことはやり、全力を尽くせたと思う。特に、私の最大の弱点だった歩行技術は、練習の成果でだいぶ上達した。重心と意識の置き方と筋力、リラックスが大切だとよくわかった。それでも入賞にはほど遠い結果となった。ただ、登山における団体競技の魅力とは、自分の失敗がチームに響くという緊張感と、仲間の失敗を自分がフォローできる喜びなのだと感じた。

（北畠　　周）

Ａ隊８班　三重県　神戸高等学校

僕は、神戸高校山岳部としての山登りが今大会のインターハイで最後となりました。順位も大切ですが、そんな中でも楽しんで山に登ろうというスタンスでインターハイに臨みました。一日目、平標山コース。バスで 10 分ほど移動し、登山口に到着。インターハイの最初の行動でしたが、登山口を入るとすぐに、松手山まで続く長い急登でした。ゆっくりとしたペースだったので助かりましたが、メインザックでの行動だったということもあり、気づくと息が上がっていました。しばらく稜線を歩くと、平標山のピークに到着しました。平標山というだけあり、ピークは平らで高山植物のお花畑がありとても奇麗でした。下りの林道は約３㎞の道のりで疲れた体にはこたえました。二日目、苗場山コース。バスで 40 分ほど移動し、登山口に到着。この日はサブザック行動でしたが、今大会で一番距離の長いコースでした。そしてこの日は、登山口から第一高速リフト降り場までチーム行動がありました。体力的には余裕がありましたが、登山道が狭く途中から隊行動のようになり、順位は十位着でした。苗場山の前の雲尾坂は急登ですべりやすく、集中して歩かないと危険な箇所でした。苗場山のピークは平らな湿原が広がっており、今まで見たことのない、また他では決して見ることのできない美しい景色でした。帰りのドラゴンドラでは約 25 分の空中散歩を楽しみました。最終日、三国峠コース。バスで 10 分ほど移動し登山口に到着。ゆるやかな登りを経て三国峠に到着。ここから急登で、一日目からも疲れが出たこともありすぐに息が上がってしまいました。三国山をトラバースし、稜線を歩いて行きました。この稜線もアップダウンが激しく思いのほか体力を奪われました。しかし、三日間の中で一番良い天気で、有望な景色を眺めながらの行動だったので、自然とサクサク歩くことができました。しばらく歩くと平標山の家に到着し多くの人に声援を頂きました。一日目と同じ下りを歩き駐

車場に到着しましま。三日間を通して、まずインターハイの規模に驚きました。高校生、スタッフの人数、サンプリングなど普段の山行では見ることがない光景を見ることが出来ました。そして何より楽しめたことが一番良かったと思います。インターハイで学んだ生きる力をこの先多くの事に活かしていきたいと思います。是非とも後輩には来年もインターハイに出場してもらいたいです。

Ａ隊８班　奈良県　郡山高等学校

私たち郡山高校山岳部は前大会でインターハイ連続７回出場を決めて、今大会で８回目となりました。先輩方が残してきた記録を絶やすことなく、今年この新潟大会に出場することができて本当に良かったです。

８月７日大会初日、私たちは５日の昼に奈良を出発して、大会に備えていたので、疲れはありませんでした。開会式では、いよいよという雰囲気が感じられました。この日の晩は、カレーをおいしく頂いたので、全員が満足して眠ることができました。

８月８日大会２日目、最初の登山行動となる平標山コースに向けて、気合十分といった感じで、最初の急登に意識を向けていましたが、隊行動ということもありペースが遅めだったので、無理なく登ることができました。天気はあまり良くはありませんでしたが、登山行動初日ということもあって程良い疲労感と達成感で気持ちの良い登山になりました。

８月９日大会３日目、この日は今大会最長、かつ最高の苗場山コースでした。第一高速リフト降り場まではチーム行動ということもあり、緊張が高まっていましたが、登山口からは、ほとんど隊行動のようだったので、一定のペースで安全に登ることができました。前日の登山行動よりも天気が良くなったので景色が良かったです。また、そのためにドラゴンドラから見ることのできる景色を十分に楽しむことが出来ました。

８月１０日大会４日目、閉会式は５日目ですが登山行動最終日ということもあり、実質的には大会最終日となりました。疲労、緊張がピークに達していましたが、三国峠で記録、読図を回収して頂いたので、良い意味で緊張を解くことができました。また、この日はとても天気が良く、肌を焼くような日差しの中で、長距離の縦走が辛くなっていきました。しかし、その好天のおかげで辛い縦走も、素晴らしい景色を楽しみながら気持ち良く歩くことができました。

この大会で、私たちは様々な方々のご助力によって自分たちの行動が支えられていることに気づかされました。また、同様に普段の山行も多くの人々の協力によって成り立っていることに、再び気づかされました。

三年生はこの大会で部活を引退しますが、一・二年生は来年の大分大会に出場できるように、これからもがんばっていこうと気持ちを新たにしました。全員無事に登山行動を終えて良かったです。

Ａ隊８班　徳島県　城ノ内高等学校

今回の苗場山系での登山は、大変充実したものとなりました。初日、筆記審査等は順調におわり、次の日の登山を待つのみとなりました。新潟の気候はとても穏やかで、昼は涼しく夜も過ごしやすく快適に眠ることができました。地面が芝生ということもあって、幕営地としてお借りした苗場プリンスホテル様には深く感謝しています。

登山行動初日、この日も一日中涼しく、登山しやすい天候でした。意気揚々と山を登ってみると、おもいのほかガスがかかっていて、山頂からのぞめるはずの絶景がみられなかったことが残念です。しかし、ゆっくり登ってくれたので、楽しんで余裕をもって登山ができました。

登山行動２日目、この日は僕たちにとって初めての 2000m超えでした。最初のチーム行動でどうなるかとおもいましたが、60 分近くで登る事が出来てよかったです。ときどき出てくる日差しが体力を奪いましたがサンプリングや多めの水分補給もあって、熱中症になることなく登山ができてよかったです。富士見坂、雲尾坂の急登急降は特に気をつかいました。そして頂上。本当にここが頂上なのかと思うほど、目の前に広がった光景に驚かされました。頂上での昼食はとても楽しみにしていたのですが、ここでもタイミング悪くガスが急にかかって景色が全く見れませんでした。順調に下っていざ世界最長のドラゴンドラへ。後ろ向きに乗ったので山の斜面だけ見る形で降り

たのですが、それでもすごかったです。

登山行動三日目、ついに審査最終日。最後だけあった一日中いい天気で今回こそはいい景色がみれるぞと思い登山開始。それまでと違ってずっと日が照っていたので今まで以上に水分をとりました。三角山では休憩できなかったのであまり頂上で周りを見渡せませんでしたが、稜線上ではいい眺めがみれたので良かったです。下りは初日と同じく平標山の家からの下りなので慣れているだけあって楽に下りられました。

今、全ての審査が終わってこの感想を書いていると、この長いようで短かった３泊４日の日々が思い出されます。今回の大会もこれで終わりかと思うと寂しいですが、これからも頑張っていきたいです。大会関係者、苗場山系で出会った方々、ありがとうございました。